

東大寺図書館蔵 『新修浄土往生傳』 影印並びに訓読文

宇都宮 啓 吾

『新修浄土往生傳』は、王古（元豊一〇七八〜一〇八五頃、北宋東都之人）の撰になる三巻の書で、戒珠撰の『浄土往生傳』に追加・増補された形で神宗元豊七年（一〇八七）に成立している。

時代的には、本邦最初の「往生伝」である『日本往生極楽記』（九八八年頃成立）より約百年程下り、それを継いだ『續本朝往生傳』（康和年中成立・一〇九九〜一一〇四）とほぼ同時期のものである。

中国撰述の「往生伝」のうち、現存する本邦の加點資料はこの『新修浄土往生傳』を除いては未だ聞かず、中国撰述の「往生伝」の訓法を知る上でも貴重な資料と考えられる。

また、中国撰述の「往生伝」という観点以外でも、豊富な仮名や声点によって、当時の国語を知る上で貴重な資料に成り得ると考えられる。

そこで、「東大寺図書館蔵『新修浄土往生傳』の国語学的検討」に先立って、その基礎資料たるべく、此の度、「東大寺図書館蔵『新修浄土往生傳』の影印並びに訓読文」を提示させて頂く事とした。

東大寺図書館所蔵の『新修浄土往生傳』一帖は、内題に本文と同筆で「新修浄土往生傳下」とあり、外題は後筆で「新脩往生傳下」とある。そこで、内題が本来の書名と推測される。

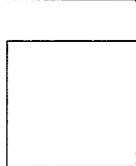
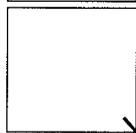
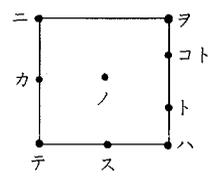
原本は上中下の三巻から成る書と考えられるが、本書は下巻のみを書写した折本装の零本で、表紙部分（表紙・裏表紙共）には薄い板が張り付けられている。料紙は、表紙部分別二三折（両面）が存する。

表紙（表紙・裏表紙共）には外題が「新脩往生傳下」と朱筆にて中央に直接書かれており、又、右肩には「東大寺図書館蔵一函三〇四号一冊」のラベルが貼付されている。縦二八・八糎、横一六・二糎である。

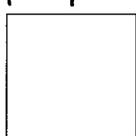
現装は右の通りであるが、本来は卷子本であったものと判断される。料紙は楮交じり斐紙にて七紙、全紙に亘って押界が施され、界高二四・五糎、界幅一・八糎、一折片面八行乃至九行、一行字数二〇字前後である。

本文には、仮名とヲコト点（第五群点）・句読点・反点が付されている。仮名字体・ヲコト点に就いては次表の通りである。

疊	ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヒ、	ン	ロ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	ル	キ	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
		井	リ		ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
有	給		ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
			ル	ユ	ム	フ	ヌ	...	ス	ク	ウ
事	奉	エ	レ		メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
		エ	レ		メ	ヘ	子	テ	セ	ケ	エ
時	...	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
		シ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ



訓合符 | 音合符



・反点      ・読点      ・句点



人名

奥書は、次の如くである。

保元三年六月十七日巳剋於東大寺北院書了

同月十九日一交點了 弁昭自手書了

願共諸衆生 往生安樂國 乃至臨終時 奉見弥陀佛

右の奥書は、本文の仮名字体と矛盾を見せず、書写・加點時のものと見て問題は無いようである。

注：本書に就いては、特に、次の如き書が参考になる。

○訓法に就いて

・築島裕『平安時代の漢文訓讀語につきての研究』（東京大学出版会、昭和三八・一〇）

・小林芳規『平安鎌倉時代の漢籍訓讀の國語史的研究』（東京大学出版会、昭和四二・三）

○仮名字体に就いて

・築島裕『平安時代訓點本論考フコト點圖 假名字體表』（汲古書院、昭和六一・一二）

（付記）

成稿に際しては、小林芳規先生の御指導を賜った。又、本資料の調査・影印並びに公表の許可に際しては、東大寺図書館の橋本聖圓館長、新藤佐保里氏を始めとして、関係者各位の御高配を賜った。記して深謝申し上げる。

## 凡例 (訓読文凡例)

- 一、本稿は、東大寺図書館蔵『新修淨土往生傳』の全文を原本に基づいて訓読したものである。
- 一、原文の各行の最初の字が訓読文に於いても明確に分るように、行頭字の直前に「▲」を付した（但し、表九丁裏六行目については、訓読の都合上、行頭字の「不」を以て改行し得ず、原則から外れている）。
- 所在に就いては、本文が料紙の表裏に書かれている為、先ず、その表裏を示し、その次に、「▲」の直後の漢字の所在を訓読文の行頭に「5才3」（第五折表第三行目）の形で示した。
- 一、訓読文の漢字は、現行の活字正字体を用いた。又、原本の漢字の異体字も、支障がない限り、出来るだけ現行の活字正字体に改めた。但し、その際、原則として一々その旨を注記しない（影印と対照出来るからである）。
- 一、原本の割注は多くは加点されていないが、僅かながら一部加点されている部分も存する為、原則としてすべて訓読したものと見做して訓下し文を記した。
- 一、原本の踊り字は、訓読文でも「と」で示し、その当該字を（ ）に包んで示した。
- 一、原本で「 」の如き反転符号が有る場合、訓読文では正しかるべき字の順序に訓読し、その旨を「顛倒」と注記した。
- 一、原本で「 」の如き補入符号が有る場合、訓読文では正しかるべき文章で訓読し、その当該字を「」に包んで示した。
- 一、原本で抹消符号が付されている場合、訓読文でも同様に示し、注記でその旨を「ミセケチ」と示した。また、その傍らに正しい字が補われている場合は、その字を補入の時と同様に「」で包んで示した。
- 一、原本の漢字等が虫損等で判読しがたい場合、訓読文では□で示した。但し、文脈からその字が予想される場合には円の如き形で示した。
- 一、原本の仮名は、訓読文では片仮名で表記する。
- 一、原文のヲトト点は、訓読文では平仮名で表記した。

一、原本には訓点の無い部分で、稿者が補読した部分は、(ヲ)(ニ)の如く( )に包み、片仮名で表した。補読の中でも、濁音符は一切用いない。

一、「讀(ミ)テ」「讀(ム)テ」等のように( )の中の語形が音便の形と音便でない形とが想定される場合には、原則として音便でない形(「ミ」)を補うこととした。

一、原文の仮名は、必ず、その仮名の漢字に添えて訓み下すこととした。

一、一字の疊字はすべて「ホ、」のように「、」に、二字以上の疊字は、「ホトく」のように「くく」、乃至は「マス、」のように「、、」に表記し、当該字を( )で包んで示した。

一、原本の漢字の内、不読のものは、「也」「而」のように「」に包んで示した。

一、原本で再読する字は、

當に貴字を生(ム)《當》(シト)。

の《當》のように表した。

一、原本の声点(六声)は、印刷の都合上、原本の如くに当該漢字の当該位置に「○」を付すことを行なわず、その漢字の下に夫々(平)(平輕)(上)(去)(入)(入輕)等と注記した。

一、原本の反点は漢字の当該位置に「・」の形で存するが、影印によって参照可能であるため、これを省略した。

一、原本の反点は同時に「て」の訓を担っている為、その訓に就いては、ヲコト点の「て」と区別する為「て」と示した。

一、原本の句点は「。」で表した。又、文脈上、句点や読点が想定されながらそれらが存しない場合には、一字分の空白を施した。

一、別種の訓法、補記の訓法が存する場合、「イ、」で包んで示した。

一、原文の人名注「一」は当該名の下に「人名」と注記した。

一、誤字に就いては、その正しかるべき字を( )に包んで下に示した。

一、句切れを示すと考えられる角筆の区切れ線は注記と共にそのまま示した。

- 一、その他、稿者の注記は、すべて「」に包んで示した。
- 一、本文に於いて、以上の凡例に示した以外の符号等が存する場合、又、注意すべき箇所は、その当該字に「\*」を付したので、影印並びに補注を参照されたい。

〔表〕

1才

正傳三十一人 附見八人

- 1 ▲ 唐南岳釋承遠
- 2 ▲ 唐五臺釋法照
- 3 ▲ 唐并州釋僧銜 啓芳 圓果 附
- 4 ▲ 唐朔方釋辨才
- 5 ▲ 唐鎮州釋白覺
- 6 ▲ 唐臺州釋懷玉
- 7 ▲ 唐觀察韋文晉
- 8 ▲ 唐李知遙
- 9 ▲ 唐鄭牧卿
- 10 ▲ 唐吳郡釋齊翰
- 11 ▲ 唐吳郡釋神皓
- 12 ▲ 唐睦州釋少康
- 13 ▲ 唐彭州釋知玄
- 14 ▲ 唐汾州釋僧藏

1ウ

7 ▲ 唐隋州約山翁等三人

8 ▲ 唐元子平

2才  
1 ▲ 唐釋雄俊

2 ▲ 唐汾州季祐 張鍾旭附

3 ▲ 唐兗州釋太行

4 ▲ 唐荊州釋惟恭 靈巖附

5 ▲ 唐長安尼淨真 衡州尼悟性附

6 ▲ 後唐溫州釋鴻莒

7 ▲ 石晉鳳翔釋志通

8 ▲ 大宋錢塘釋紹巖

9 ▲ 大宋東京釋守真

2ウ  
1 ▲ 大宋餘杭釋悟恩

2 ▲ 大宋永明寺智覺禪師延壽

3 ▲ 大宋蒼山釋遵式

4 ▲ 大宋觀音縣君吳氏 侍女附

5 ▲ 大宋明州黃長史女

6 ▲ 大宋司土王仲回

7 ▲ 華嚴講師有誠

8・9 ▲ 南岳の彌陀和尚承遠は始(メ)〔於〕成都の唐(ニ)學(ヒ)次(三)川の詵に資(ル)。▲詵〔人名

は即(チ)黃梅の忍公〔人名の法嗣(ナリ)〕也。巖石(ノ)〔之〕下に居(ス)。人之(ニ)食を遺(オク)

3オ

1 (レ)は則(チ)▲食(シ)、遺(ラ)不(レ)は、則(チ)土泥ヲ食(ラヒ)、草木を茹(ラフ)。其(ノ)

2 衣を取(ル)こと亦(モ)是に類(ス)。初(メ)法▲照〔人名國師、廬山に在(リ)〕て三昧に入(リ)て安樂

3 國に於(テ)幣衣を蒙(ル)侍▲佛(ノ)者を見(ル)。彌陀告(ケ)て曰(ハク)、此(レ)衡山ノ承遠〔人

4 名(ナリ)〕也。出(テ)て〔而〕密(カ)に求(ム)ルニ師を〔於〕巖▲谷の間に見(ル)。羸形垢

面(ニシ)て薪を負(ヒ)、水を汲(ミ)て以(チテ)清衆に供(ス)。之(ヲ)望(ム)に釋然と(シ)

5 て定▲中所見(ナリ)〔也〕。其の事を問(フニ)符(フ)契(ケイ)乃(チ)師トシ(テ)事(ツク)フ〔之〕。

6 法照〔人名京に至(リ)〕て代▲宗〔人名の爲に師の道徳を言(フ)マ。天子南に向(ヒ)〕て禮(ス)〔焉〕。

7 其(ノ)後名益▲顯(ハル)。人皆▲布帛を負(ヒ)、木石を運(ヒ)て以(チ)て送(ル)拒(マ)不、

8 營(マ)不、祠宇日(ナ)ラ不(シ)て〔而〕成(ル)。徳宗〔人名額を▲賜(ヒ)〕て彌陀寺と曰(フ)。

9 人(ノ)其(ノ)化に従(フ)者萬(ヲ)以(チテ)計(フ)。凡(テ)物、衆に供(スル)に、餘

有(レ)は▲即(チ)以(チ)て餓疾の者に施(ス)。後に安坐(シ)て〔于〕寺に終(ハル) 壽九

3ウ  
1・2

▲釋法照(ハ)南梁(ノ)人(ナリ)。唐の大曆二年に〔于〕衡州の雲峰寺に棲(ム)。▲慈忍戒定

- 3 時の歸(スル)所(ト)爲。二月十三日に僧堂に於て食す。鉢(ノ)中に五色の雲を▲觀(ル)。  
 (雲)の中に寺有(リ)、<sup>寺</sup>(ノ)〔之〕東北に大山有(リ)。<sup>山</sup>に澗有(リ)、<sup>澗</sup>(ノ)〔之〕  
 4 に〔北(ニ)〕石▲門有(リ)。<sup>門</sup>(ヲ)去(ル)こと五里可(リニシ)て復一寺有(リ)。金  
 5 (平整)勝(上)題(シ)て曰(ハク)、大聖竹林寺(ト)。照(人名)目に觀(ル)と▲雖(モ)而(モ)未  
 6 (タ)果(シ)て何の境と知(ラ)《未》〔也〕。二十七日の食時に復鉢の▲中に於て五色の雲を見ル  
 7 中に數寺を現す。山林穢惡有(ル)こと无(シ)。純金色界▲池臺樓觀、衆寶閒錯セリ。萬の菩薩衆、  
 8 〔而〕其の中に處す。▲<sup>中</sup>に諸佛の嚴淨の國土 種々(種)の勝相有(リ)。照(人名)所見を異(ト  
 9 シ)て因(リ)て訪▲問(スル)に〔之〕嘉延(人名)曇暉(人名)の二僧有(リ)て曰(ハク)、聖(ハ)角  
 1 息神(ノ)變化(ハ)、凡情を以(チ)て▲測(ル)可(カラ)不。若(シ)山川ノ面勢を論(セ)  
 2 は、乃(チ)五臺爾リ。四年の夏、照(人名)衡州の湖▲東寺に於て五會念佛の道場を啓ク。其(ノ)  
 3 年の六月二日五色(ノ)祥雲▲彌(彌)其(ノ)寺に覆(ヘリ)。雲中に亦樓閣有(リ)、上に數の梵  
 4 僧有(リ)、身▲丈餘可(リ)、錫を執(リ)て行道(ス)。又彌陀佛と二菩薩與(ト)を見(ル)、其(ノ)  
 5 身高▲大(ニシ)て虚空界に等(シ) 日既に暮(レ)ヌ〔矣〕。照(人名)道場(ノ)〔之〕外に於て  
 6 老人に遇(フ)。曰(ハク)、▲汝先(ツ)願を發セリ。金色界に於て大聖を禮觀すヘシ(ト) 今  
 7 何(ソ)輒(チ)止(マルト)。照(人名)か曰(ハク)、時の難 ▲路の難か止(マ)ラ不ハ、如何(ト)。  
 8 ▲對(スル)に暇(アラ)《未》(ル)に老人忽(ニ)隱(レヌ)。照(人名)所見(ノ)勝異を以(チ)

9 て重(ネテ)願を發(シ)て曰(ハク)、願(ハク)は此の身を以(チ)て大聖に奉▲キ觀(去) (セ)

1 ム 縱(ヒ)火聚、氷河を經トモ、終に退墮无(ケ)ム(ト)。其(ノ)年の八月一十▲十三日に同ミセケチ

2 志數人與、遂に南岳を離ル 果(シ)て艱險无(シ)。五年四月▲五日、五臺縣に至(ル)。遙(カ)

3 に寺の南を見(ル)に數道の光有(リ)。六日に佛▲光寺に達す。一に鉢の中の所見(ノ)如(クシ)

4 て略(モ)差別无(シ)。是の夜の四更に復異▲光有(リ)、北ヨリ來(リ)て照「入名」ニ射ル。 (照)

「入名乃(チ)問(ヒ)て曰(ハク)、此(レ)何(ノ)祥ソ(也) 吉凶焉カ在ル(ト)。僧ノ云(ハ

5 ク)、此(レ)▲大聖ノ不思議ノ光ノ汝カ身心を攝(シタ)マフ(ノミ)「耳」(ト)。照入名聞(キ)

6 て「之」即(チ)威儀を具(シ)て歩す 其の光を▲尋(ネ)て遂に一寺に至(ル)。 (寺) (ノ)

7 「之」東北、五里可(リ)ニシ)て果(シ)て山有(リ)、 (山)に澗有(リ)、▲澗の北に石門有(リ)。

8 (門)の旁に二の青衣有(リ)、纔(カ)に八九歳(ナリ)。顔貌端正ナリ。一をは善財と▲稱(ス)。

一(ヲ)は難陀(ト)稱(ス)。相(ヒ)見て歡喜(シ)て法照「入名」を問訊(シ)て云(ハク)、何

9 (ノ)故(ニ)多▲時に生死に流浪(シ)て始(メ)て來(リ)て相(ヒ)見(ルト)。遂に照「入名

1 を引(キ)て門に入(リ)て北に行(ク)こと五里幾リ(ニ)、▲一の金の門を見(ル)。 (門)の

上に樓有(リ)、高(サ)百尺(ナリ)。兼(ネ)て挾(入)懸樓有(リ)。漸(ク)門所に至(リ)て

2 方に▲見(ル)に一の寺有(リ)。前に大(ナル)金橋有(リ)。寺門に大ナル金榜有(リ)、題(シ)

3 て曰(ハク)、大聖▲竹林(ノ)「之」寺(ナリト)。方圓二十里可(リ)、中に一百二十院有(リ)。

4・5 (院)院に皆▲寶塔有(リ)。黄金を地と爲す。華臺、玉樹、其の中に充滿(セリ)。照「入名」▲寺に

- 6 入(リ)て講堂の内に至(リ)て見(ル)に文殊西に在す 普賢東に在す 皆師子の▲高座に據(ル)。  
其(ノ)身及(ヒ)座、高(サ)百尺可(リ)ナリ。說法(ノ)〔之〕音、歴と(シ)て、歴と(シ)て  
て耳に在(リ)。文▲殊の左右(ニ) 菩薩萬數(ナリ)。普賢に(モ)亦無數(ノ) 菩薩有(リ)て  
前後(ニ) ▲圍繞(セリ)。照入名二菩薩の前に於て禮を作(シ)て問(ヒ)て曰(ハク)、未代の  
9 凡夫、智識淺▲劣ナリ。佛性心地、顯現(ニ)由(ルコト)无(シ)。未夕修行、何の法門に於て最  
1 (モ) 團▲要と爲(シ)て成佛を得 衆生を利樂(シ)易(キカラ)審(ラ)カ(ニセ)《末》タシ。惟願  
2 (ハク)は大聖、我(カ)疑網を斷(チタ)マヘ(ト)。文殊の▲曰(ハク)、汝(カ)請問(スル)  
所(ハ)、今正(ニ)是(ノ)時(ナリ)。諸の修〔行〕朱書門(ハ)、念佛に如(クハ)无(シ)。  
3 三寶を供養(シ)▲福慧雙(ヒ)修(スル)こと此(レ)最(モ)要(ト)爲(ス)。我過去劫の中  
4 に於て觀佛に因(ル)か故(ニ)念佛に▲因(ル)か故(ニ)、供養に因(ル)か故に〔於〕一切(ノ)  
5・6 種智を得(タリ)。是(ノ)故に一切諸法▲般若波羅密多、甚深禪定、乃至諸佛正徧知海、皆念佛▲  
7 從(リ)、〔而〕生ず。故(ニ)知(ル)念佛は諸法(ノ)〔之〕王ナリ(ト)。汝等當に常に▲念(シ  
テ)休息(スルコト)无(カラ)令(ム)應(シト)。照入名か曰(ハク)、當(ニ)云何(カ)念  
8 (ス)《當》(キト)。文殊の曰(ハク)、此の世界の西に阿▲彌陀佛有(リ)。彼(ノ)佛(ノ)願力  
9 (ハ)不可思議(ナリ) 當に彼(ノ)國を繫念諦觀(シ)て閒斷▲无(カラ)令(ム)《當》(シ)。  
命終(ノ)〔之〕後、決定(シ)て彼(ノ)佛國の中に往生(ス)。永(ク)退轉(セ)不(シ)て

6オ

- 1 速(ヤカニ)三界を▲出(テ)て疾(ヤカニ)佛(ニ)成(ル)こと得(ト)。是(ノ)語を説(キ)

- 2 已(リ)て時に二の大聖、各金色の▲手を舒(へ)て法照〔入色〕か頂を摩(シ)て〔而〕爲に授記(ス)ラク、汝已に佛を念(スルカ)故に久(シカラ)不(シ)て无上▲正等菩提を證(ス)ヘシ。若(シ)善男子、善女人(ノ)、疾(ヤカ)に成佛(セムト)願(ハ)ム者は念▲佛(ニ)過(クルコト)無(シ)。則(チ)能(ク)速(ヤカニ)无上菩提を證す。此の一報(ノ)〔之〕身を盡(シ)て定(メテ)苦海を超(エムト)。是(ノ)語を▲説(キ)已(リ)て時に文殊大聖、而(シテ)偈を説(キ)て言(ハク)、汝等解脱を求(メムト)欲(ル)▲者は、當に先(ツ)我(カ)慢心、嫉妬、名利、及(ヒ)慳貪(ヲ)除(ク)應(シ)。斯(ク)の如(キ)、▲不善意を去却(シ)て應(ニ)彼の彌陀の號を專念(ス)《應》(シ)、即(チ)能(ク)佛境界(ニ)安住す。▲若(シ)能(ク)佛境界に安住(セハ)、是(ノ)人常に一切佛を見(ル)。若(シ)常に▲一切佛を見(ル)こと得は、即(チ)能(ク)眞如(ノ)性を了達す。若(シ)能(ク)速(ヤカ)に諸(ノ)煩惱を斷(タ)は、則(チ)▲能(ク)眞如の性を了達す。苦海(ノ)中に在(リ)て〔而〕常樂(スルハ)、譬(ヘ)は蓮花の水に▲著(カ)不(ル)か如(シ)。而(シテ)心清淨(ニシ)て愛河を出(テハ)、即(チ)能(ク)速(ヤカ)に菩提の果を證す(ト)。〔於〕是に▲文殊師利菩薩、又偈を説(キ)て言(ハク)、諸法唯心造、心ヲ了〔サト〕ルコト不可▲得ナリ、常に此の修行に依(リテ)、是(ヲ)眞實相と名(ツク)。普賢菩薩、又▲偈を説(キ)て言(ハク)、普(ネク)汝及(ヒ)一切衆を觀(ルニ)、常(ニ)應(ニ)諸(ノ)比丘に謙下(ス)《應》(シ)。忍辱(ハ)▲即〔顛倒〕(チ)是(レ)菩提(ノ)因、无瞋\*(ハ)必(ス)端正(ノ)報(ヲ)招(ク)。一切衆見て皆歡喜す 即(チ)无上(ノ)菩提心を▲發(ス)。

7オ

- 8 若(シ)此(ノ)語に依(リ)て〔而〕修行(セ)は、微塵(ノ)佛刹、▲心從(リ)、現す、悉(ク)能  
 9 (ク)廣(ク)諸行(ノ)願\*を修す。一切の諸(ノ)有情を運接(シ)て、速(ヤカ)に愛▲河を離  
 (レ)て彼岸に登(ル)。法照〔人名〕聞(キ)已(リ)て歡喜踊躍(シ)て疑網悉(ク)除(カル)。  
 1 復禮(マツ)を▲作(シ)已(リ)て掌(ヲ)合(セ)て〔而〕立(ツ)。文殊師師〔衍字〕利告(ケ)て言(ハ  
 2 ク)、汝諸(ノ)菩▲薩院(ニ)往詣(シ)て次第(ニ)巡禮(ス)可(シト)。法照〔人名〕教を受(ケ)  
 3 て次第(ニ)巡禮(ス)。遂に七寶(ノ)果園に至(ル) ▲其(ノ)果纒マツに熟(シ)て大(キサ)  
 盆(ノ)如(キ)可(リ)ナリ。即(チ)取(リ)て之を食(ス) 味甚(タ)香美ナリ。法照〔人名〕  
 4 ▲食(ヒ)已(リ)て身意泰然ナリ。廻(リテ)大聖の前に至(リ)て禮レを作(シ)て辭退(ス)。  
 5 還(リ)て二童▲子を見(ル)に送(リ)て門外に至(ル)。禮已(リ)て頭を擧(クル)に遂に隱  
 6 (レ)て見(エ)不サ。師乃(チ)愴サウ然と(シ)て▲悲感を倍增す。四月八日に華嚴寺の般若院の  
 7 西樓の下に至(リ)て安止スルコトイサ十三▲日 〃(目)中の後に法照〔人名〕五十餘僧與、同(シ  
 8 ク)金剛窟に往(キ)て巡禮(シ)て到(リテ)▲无著(ヲ)大聖處に見て度ツ、ツン ム 心に二十五佛  
 9 の名を禮す 凡(テ)禮(スル)こと十餘徧(ナリ)。▲忽に其(ノ)處を見(ル)に盡(ク)是(レ)  
 1 琉璃(ニシ)て七寶(ノ)宮殿ナリ。文殊、普賢、一▲萬の菩薩、及(ヒ)佛陀波利、俱に一會に  
 2 在(リ)。法照〔人名〕見已(リ)て惟タ自ラ▲慶喜(シ)て衆に隨(ヒ)て寺に歸(ル)。是の夜中の  
 3 時、華嚴寺の西樓(ノ)上に向(ヘ)は▲忽に寺の東の山(ノ)半に見(ル)に五盞の聖燈有(リ)

7ウ

- 4 大(キサ) 椀(上)の如(シ)。照(入名)祝(リ)て曰(ハク)、請(ハク)は百盞に▲分(レ)ヨ(ト)。  
燈遂に百盞に分ル。再(ヒ)祝(リ)て曰(ハク)、請(ハク)分(レ)て千盞と爲(ト)、燈
- 5 又千盞に▲分ル。行(ク)々行(ク)相(ヒ)對(シ)て〔而〕山(ノ)半に徧ネシ。此に因(リ)
- 6 て身を忘(レ)て獨(リ)金▲剛窟(ノ)所に詣(テ)て大聖を見(ル)ことヲ願フ。夜の後分に
- 7 於て金剛窟に至(リ)て重(ネ)て▲二十五佛(ノ)名を禮(スル)こと十徧、五會(二)阿彌陀
- 8 佛(ヲ)念(スル)コト)二千口。悲淚(シ)て啓▲告(ス)ラク、自(ラ)无始の惡業を(モ)て
- 9 生死に漂流(スル)ことを惟フテ(ヒ)て種々(種(二)剋責(シ)て身ヲ躡ツコト、三▲十餘
- 次(二)自(ラ)撲ツコト未(タ)已(ラ)《未》(ル)に、忽に一の梵僧を見(ル)身長七尺。
- 1 稱(ス)ラク是(レ)佛▲陀波利(入名)と。法照(入名)ノ前に至(リ)て語(リ)て曰(ハク)、師
- 2 か今悲泣(スル)、何の意有(リヤト)〔耶〕。答(へ)て云(ハク)、大聖を見(ムコトヲ)▲願(フ
- 3 ト)。波利(入名)か言(ハク)、師(但)目を閉(チ)て我に隨(ヒ)て〔而〕行(ケト)。遂に法▲照(入
- 4 色を引(キ)て金剛窟に入(ル)。一院を見(ル)に黄金を(モ)て勝(三)題(シ)て云(ハク)、
- 5 金剛般若(ノ)▲〔之〕寺(ナリト)。々(寺)皆七寶莊嚴ナリ。房、廊、樓閣、都(テ)一百七十五
- 6 間(ナリ)。▲金剛般若、一切經藏、寶閣の中に在(リ)。遂(ニ)大聖に向(ヒ)て身(ヲ)投(シ
- 7 テ)▲禮を作ス。掌(ヲ)合(セ)て文殊師利に啓告(シ)て言(ハク)、唯念(フ)何(ノ)時
- 8 にか速(ヤカ)に无上正▲等(ノ)菩提を證(シ)て廣(ク)衆生を度(シ)て无餘に入(ラ)令
- 8 (メム)。何(ノ)時にか我か无上(ノ)願海を果(サムト)。是(ノ)願を▲發(シ)已(ル)。爾

8ウ

- 9 の時に文殊師利告(ケ)て言(ハク)、善(キカナ)〔哉〕、善(キカナト)〔哉〕、再(ヒ)摩▲頂を爲(シ)て授記(シ)て言(ハク)、汝(カ)心眞正(ニシ)て菩提爲(ラムコトヲ)志す。能(ク) 1 惡世に於て斯の▲勝願を發(シ)て群生を利樂す。汝か說(ク)所の如(ク)、必(ス)當に速(ヤカ)に无上菩提を證(シ)、必(ス)▲能(ク)速(ヤカ)に普賢の无量(ノ)行願を具(ス)ヘシ。 2 圓滿具足(シ)て天人の師と爲(リ)て无▲量の衆を度(スヘシト)。法照〔人名〕記を蒙授(シ)已(リ) 3 て稽首(シ)て禮を作(シ)て又問(ハク)、未(タ)審(カナラ)《未》、今時、▲及(ヒ)未來世(ニ)、一切志を同(シクシ)て佛を念(シ)四衆、名利の爲(ニセ)不(シ)て勇猛精▲進ナル、 4 臨終に定(メ)て佛の來迎接を感(シ)て上品に往生(シ)て速(ヤカ)に愛河を離(レ)ムヤ、 5 否(ヤト)。文殊▲告(ケ)て言(ハク)、決定疑(ヒ)无(シ)。名利の爲にシ、及(ヒ)志(志)心 6 (セ)不(ル)ことを除ク(ト)。言(ヒ)訖(リ)て遂に童子▲難陀〔人名〕を遣(リ)て茶湯を將(チ) 7 て來(ラ)シム 并ニ藥食アリ。法照〔人名〕か言(ハク)、藥食(ヲ)須(モチ)不(ト)。大▲聖の言 (ハク)、但食(セ)ヨ 畏(ルルコト)无(カレト)。遂に兩碗の湯を進(ム)。一碗は味甚(シク) 9 香美(ナリ)。大聖(モ)▲亦自(ラ)三碗の湯、并(ヒ)及(ヒテ)藥食を進(ム)。其の器皆琉璃寶を(モ) 1 て成(ル)。既(ニシテ)〔而〕波利〔人名〕を▲令(送)出(サ)《令》(ム)。照〔人名〕意ニ出(ツル) 2 こと(ヲ)欲(セ)不(ト)。大聖告(ケ)て言(ハク)、不可ナリ。汝今此の身は元▲是(レ)質尋不淨 3 (ノ)〔之〕體ナリ 此に住(ム)應(カラ)不(ト)。但汝(カ)爲に今 我與、緣熟(ス)▲此(ノ) 一報盡(キ)て淨土に生(ルル)こと得て方に始(メ)て來(ル)こと得ム(ト)。言(ヒ)訖(リ)

9オ

- 4 て見(エ)不、還(リ)て窟前に在(リ)。▲佇立(シ)て天明(ケ)ヌ 獨(リ)一の梵僧を見(ル)。
- 5 法照入色に告(ケ)て曰(ハク)、好シ去ネ、好(シ)去(ネ)、努力(ユビ)、奴(ヌ)、▲勇猛精進ナレ(ト)。是(ノ)語を作(シ)已(リ)て忽然と(シ)て見(エ)不。良久(シク)遅廻(シ)て悲
- 6 喜▲已(マ)不。始(メ)て大聖の悲願の思議(ス)可(キ)こと難(キ)ことを知(リ)ヌ。法
- 7 照(入色聖異を睹(ル)と雖(モ)、敢(へ)て妄▲傳(セ)不。疑謗(ヲ)生(スル)ことを恐(ル)。
- 8 冬十二月の初に至(リ)て遂に華嚴寺に於て念佛道▲場に入(リ)て載チ念フ 文殊、普賢の我(ニ)久(シカラ)不(シ)て當に无上(ノ)菩提を證(ス)《當(キ)コトヲ記ヒシヲ。又我(ニ)阿
- 9 彌陀佛を▲念(シ)て決定往生(スル)コトヲ記セリ(ト)。遂に粒(チ)絶(チ)テ二期二邀(リ)テマて淨土に生(レ)て无▲生忍を得 速(ヤカ)に苦海を超(エ)て群品を救度(セ)ムと誓フ。
- 2 是(ノ)如(ク)七日(ノ)初夜(ニ)、正念佛(ノ)時に忽に▲一の梵僧を見(ル)。道場の内に
- 3 至(リ)て法照(入色に告(ケ)て曰(ハク)、汝(カ)〔之〕淨土、華臺生(シヌ)〔矣〕。後三▲年に華開(キ)テ汝(カ)期至ラム〔矣〕。然(シテ)汝か見(ル)所(ハ)〔者〕臺山(ノ)境界、
- 4 何(ノ)故(カヲ)説(カ)▲不(ト)。言(ヒ)訖(リ)て〔而〕隱(ル)。翌日の申時ニ、正念
- 5 誦の次に復(マタ)梵(顛倒)僧を見(ル) 年▲八十約(カ)り、神色嚴峻(甚)ナリ。法照(入色に告(ケ)て曰(ハ
- 6 ク)、師(ノ)見(ル)所(ハ)〔者〕臺山(ノ)境界、何(ソ)▲實に依(リ)て記録(シ)て普
- 7 (ク)衆生に示(シ)て見聞(スル)所(ノ)モノヲ令て菩提心を發(シ)て惡を斷(チ)善を▲修(シ)て大利樂を獲(《令(メ)不(ル)師何(ソ)秘密(シ)て他に向(キ)て説(カ)不(ルト)。

10オ

- 8 照〔人名答(へ)て曰(ハク)、實に▲心秘密スルニ有ルコト无シ 斯の事に恐(ラ)クハ人の疑謗  
 (シ)て〔於〕地獄に墮(スル)を 所以に説(カ)不(ト)。梵僧告(ケ)て▲云(ハク)、大聖文  
 殊、此の山に在す(ヲ)見(ル)に(スラ)尙人の謗有(リ)。豈(ニ)況(ムヤ)汝(ニ)於(テ)  
 1 ヲヤ。汝(ノ)今▲見(ル)所(ノ)境界、但多人(ノ)見聞(ノ)者(ヲ)令て菩提  
 2 心を發(シ)て此(ノ)山に來(リ)登(リ)テ、▲无量无边(ノ)罪を滅(シ)、惡を斷  
 3 (チ)、善を修(シ)、佛名を稱念(シ)て淨土に生(マレム)こと得(レ)メヨ。即(チ)▲是(レ)  
 4 无量无边の衆生を利益ス 豈(ニ)大(ナラ)不(ヤ)哉。何(ソ)疑謗を慮(リ)て秘(シ)  
 5 て▲〔而〕説(カ)不(ルト)。法照〔人名聞(キ)已(リ)て答(へ)て云(ハク)、謹(ミ)て所  
 6 教に依(リ)敢(へ)て秘密(セ)不(ト)。梵僧▲微笑(シ)て即(チ)隱(レ)て現(レ)不。  
 7 法照〔人名方に所教に依(リ)て前に逢ヒ遇フコトヲ具(ニ)シテ、實録(シ)て衆に▲示す。江  
 8 東の釋惠從〔人名大曆六年正月九日を以(チ)て花嚴▲寺の僧崇暉〔人名明謙〔人名等三十餘人與、法照  
 9 〔人名に隨(ヒ)て金剛▲窟(ノ)所に至(リ)、親(シク)般若院の所に遇(ヒ)て石を立(テ)テ  
 10 標(平懸)誌(去)ス。同行(ノ)徒衆、虔誠▲瞻仰(シ)て悲喜交集(ス)。倏(ニ)其の處に聞クニ鐘(平  
 1 過)鏗然トシテ鍾聲ア(リ)テ清音▲雅(上)亮ナリ。衆感驚(シ)て靈異を歎(シ)て之を精舍(ノ)  
 2 屋壁に書(シ)て普(ク)見▲聞(レ)て同(シク)勝心を發(シ)共に佛果を期(サ)《使》(ム)。  
 3 後(ニ)見(ル)所の、竹林寺の處に於て特に▲一寺を建(テ)て竹林と號す(焉)。工畢(リ)て  
 照〔人名か曰(ハク)、吾(カ)事已(リ)ヌ〔矣〕。吾豈(ニ)久(シ)ク〔於〕此に滞(ラ)ムヤ

10ウ

4 ▲〔哉〕。日を累(ネ)不(シ)て滅を示(ス)。向二梵僧(ノ)〔之〕説を聞(ク)コトを逆推スルに果(シ)て三年(ナリ)

5 ▲釋僧銜(ハ)并州(ノ)人(ナリ)。少(クシ)て慈氏を念(シ)て内院に生(マレム)ことを期(ス)。年九十に至(リ)て▲道綽禪師〔入名〕の淨土を以(チ)て未悟を誘掖(スル)に遇(ヒ)て始(メ)て廻心す〔焉〕。銜〔入名〕〔於〕類▲暮に迫(ル)を以(チ)て積累(ノ)〔之〕功、大(ナラ)

7 不。〔於〕是に早暮に佛を禮(スル)こと常に千拜、佛(ノ)▲〔之〕號を念(スル)こと常に萬遍。寤寐に勤策(入)〔シ〕て競(キヨウ)〔平聲〕と(競)と〔シ〕て〔而〕懈(ラ)不(ル)こと〔者〕三年なり 眞

8 ▲元九年に疾有(リ)。〔于〕大ニ漸(ス)ムに至(リ)て弟子に謂(ヒ)て曰(ハク)、吾有漏ノ人ナリ 方

9 11オ1・2 に疾有ルニ▲慈(リ)テ〔之〕誑(ナシ)意(ヒ)シ、阿彌陀佛、我か香衣を授ケ、觀音、勢至、▲我か寶手を示(ス)コトヲ。此(ニ)由(リ)テ、西(ヲ)以(チ)テ、皆淨土の境ナリ。吾其(ノ)佛

3 に從(リ)て去(ナム)ム(ト)〔矣〕。遂に終(リ)ヌ。後▲七日、異香散(セ)不(ス)并分(平)〔ノ〕

4 〔之〕人因(リ)て淨土に於て信を發す〔焉〕。〔角筆ノ区切レ〕時に汾西(ノ)▲悟眞寺に啓芳〔入名〕圓

果〔入名〕の二法師有(リ)。昔、嘗老(イタル)を以(チ)て銜〔入名〕を敬(フ) 既(ニシ)て又其(ノ)

5・6 事に目▲撃す。乃(チ)觀音の像の前に於て往ノ咎を懺悔す。仍(チ)楊枝を折(リ)て▲觀音の

手に置(キ)て誓(ヒ)て曰(ハク)、芳〔入名〕等、淨土に於て果(シ)て緣契有(ラ)は、當(ニ)

7 楊枝を以て七▲日萎(レ)不ラ《使》メヨ(ト)。期に至(リ)て〔而〕楊枝(ノ)益(ス)茂(ル)。芳〔入

8 名〕果〔入名〕慶ヒ抃(テ)夕を以(チ)て晝を兼(ネ)て觀念を捨(テ)▲不(ス)後數月に觀念の中に

11ウ

- 9 於て忽に覺ユ 自(ラ)七寶の大▲池に臨(ム) 〓 (池)の間に大寶帳有(リ)。身其(ノ)中に入(ル)。目觀音、勢至の寶▲華臺に坐(スル)を見(ル)。〓 (臺)ノ下二蓮華彌滿(ツル)こと千萬。
- 2 阿彌陀佛西由(リシテ)〔而〕來(リ)て▲一の最大の蓮華に坐(シタマ)へリ。〓 (垂)中(ノ)光明、互に相(ヒ)輝映す。芳[入名]等、前(ミ)て禮問(シ)て曰(ハク)、▲閻浮の衆生、經に依(リ)佛を念(シテ)此に生(ルル)こと得(ルヤト)〔耶〕。佛芳[入名]に告(ケ)て曰(ハク)、如(シ)我(カ)▲名を念(スレハ)皆我か國に生(ル)一念(モ)有(ル)こと无(クシ)て〔而〕生(ルル)者(アラ)不(ト)。又其の國を見(ル)に地平(ニシ)て▲掌の如(シ)。寶幢、珠網、上下間錯セリ。又一僧ノ一の寶車に御(シ)て逐(入聲)〓逐(ト)シて▲〔而〕來(ル)ヲ見(ル)。
- 6 芳[入名]等に謂(ヒ)て曰(ハク)、吾は法藏[入名](ナリ)〔也〕。夙(ノ)願因を以(チテ)の故に來(リ)て汝を迎フ(ト)。芳[入名]等車に▲乘(リ)て前(ミ)邁ク(ト)。又覺(ユ)、其(ノ)身(ノ)寶蓮華(ニ)坐(スルコトヲ)。又聞(コユ)、釋迦如來(ト)、文殊菩薩▲與、梵音聲を以(チ)て淨土を稱讚(スルヲ)。其の前に又大殿有(リ)。▲殿に三道の寶階有(リ)。第一道の上は純(ニシテ)是(レ)白衣(ナリ)。第二道(ノ)上は僧俗相(ヒ)▲半(ナリ)。其(ノ)第三道は惟僧(ニシ)て俗无(シ)。佛道上の僧俗を指(シ)て芳[入名]に謂(ヒ)て曰(ハク)、此(レ)皆▲閻浮念佛(ノ)〔之〕人の遂に〔於〕此に生(ル)ルナリ。汝奚ソ自(ラ)勉メ不(ルト)〔也〕。芳[入名]果[入名]既に悟(リ)て▲歴(ト)〔與〕其(ノ)儔ト、之を言(フ)。後五百、二人病无(クシ)て遽に鍾の聲を聞(ク)。之(ヲ)傍の▲僧に問(フ)。咸曰(ハク)、聞(カ)不(ト)。芳[入名]果[入名]

12オ

- 5 色か曰(ハク)、鍾(ノ)聲は乃(チ)我(カ)事ナリ。爾か有(ル)ニ非シ(ト)〔矣〕。頃刻に▲  
 二人同(シ)ク終(リ)ヌ〔焉〕
- 6 ▲釋辨才(ハ)襄陽(ノ)人(ナリ)。母初メテ姪(平瀧)娠(去)シテ即(チ)倏に輩(平懸)茹(平瀧)を  
 惡ム。其の▲夕に誕スル(ニ)至(リ)テ香氣室に盈(テ)リ。七歳(ニシ)テ出家(ス)。後乃(チ)  
 列郡に周遊(シ)テ博(ク)▲經籍を窮(ム)。祿山(人名)紀(上)を于イシトキ、河洛に血(入)腥(平懸)ス。  
 9 才(人名)乃(チ)疾に託(ケ)テ音を絶(チ)テ語を(ナサ)不(ル)こと凡(ソ)▲三年。祿山(人名)か  
 8 兵敗レテ肅宗(人名)疊(ネ)テ璽書を降(シ)テ以(チ)テ褒(平懸)美(上)を形(ア)ズ 才(人名)淨土に▲於テ  
 潛修、密進(スル)こと二十許(リ)ノ年(マテ)、未(タ)嘗(テ)〔於〕人に言(ハ)《未》。但  
 2 任▲公(人名)與(善)密カナリ。一日に任(人名)に謂(ヒ)テ曰(ハク)、才(人名)以(ミ)レは幻身已に  
 3 類齡に及(ヒ)タリ 此の報身を盡(シ)テ▲必(ス)淨土に生(レ)ム。所生ヲ遂(ケ)ムコト  
 4 ヲ期(ス)ルコト蓋(シ)十年(ノ)ミ〔爾〕。十三年の秋、疾有(リ)。(于)▲暮冬の八日に至(リ)  
 5 弟に謂(ヒ)テ曰(ハク)、汝任公(人名)に詣(テ)マテ言(イ)ヘ〔之〕。向(ノ)〔之〕期(スル)所、  
 6 已に▲十年に及(ヒ)タリ、公(人名)忘(ルル)こと无(カ)レト〔焉〕。弟子其(ノ)言を以(チ)  
 7 白(ス)〔之〕。公(人名)か曰(ハク)、豈(ニ)師ノ〔之〕▲我に別スルカ(ト)〔耶〕 驟(ニ)往  
 6 (キ)テ省(ミ)問(フ)〔之〕。門に及(フ)ニ或(アル)〔ヒト〕報シテ〔之〕曰(ハク)、任公(人名)至(レ)リ(ト)〔也〕。  
 7 才か曰(ハク)、至(レ)は▲則(チ)吾其(レ)吉(誤字)〔去〕(ラム)ム(ト)〔矣〕。乃(チ)自(ラ)  
 8 跣坐シテ湛然ト(シ)テ滅を示す。時に邑ノ子(顯)〔人名〕從(ヒ)テ▲役ス 城(ノ)上に其の音樂

13オ

9 を聞(クニ)西(ノカタヨリ)來(リ)て合奏(ス)。又諸(ノ)妙香氣の▲西由(リ)、散(シ)下ルを聞(ク)。「于」清且に至(リ)て益盛(トクスマス)〔リ〕ナリ〔焉〕

- 1 ▲釋自覺(ハ)博陵(ノ)人(ナリ)。諸(ノ)經律、大小(ノ)〔之〕乘を習(ヒ)て倏然と(シ)て分辨す。▲久(シク)ア(リ)て〔而〕念(ヒ)て曰(ハク)、人事粉(平)トシテ曰(ニ)新(タナルコト)萬端(平)ナリ。若(シ)泰山に入ラハ、一の盤石(ノ)▲〔之〕上を得て茅を結(ヒ)て以(チテ)居(ス)ラム(ト)。大曆元年に平山(ノ)〔之〕西ノ重林院を得タリ。▲覺(人名)か曰(ハク)、空山、無人(ニシ)て煩慮生(セ)不(ス)以(ミ)レは煩慮生(セ)不(ル)〔之〕地、豈(ニ)▲宜(シ)ク佛教聞(ク)コト无(カ)ル《宜》(カランヤ)〔乎〕。固(ヤトヒ)に鬼神在(ル)こと有(リト)〔焉〕。〔於〕是に諸(ノ)幽の陰の爲に▲晨夕に講貫(スルコト)〔者〕三年。五年に大に早(シ)て群盜蜂起(ス)。又(加)ヘテ林▲麓(人名)蒙(平)翳ト(シ)て虎狼跡を交フ。覺(人名)果實を採(リ)て日に一食に充ツ。恆陽の▲節度使張昭(人名)時ノ亢(去)早を以(チ)て躬(ラ)山に入(リ)て請(ヒテ)曰(ハ)ク、昭(人名)政術無(クシ)て禍百姓ヲ▲累(トク)ハス 三年(九陽)〔シ〕て涓(平)澤下(ラ)不(ス)咎を引(キ)て自(ラ)責(ム)、良に補(ト)〔スル〕こと无(シト)▲〔矣〕。又曰(ハク)、昭(人名)聞ク 龍王師に依(リ)て法を聽(キ)て諸(ノ)儔類(ト)與、其の雨を施(ス)コトヲ忘(レ)タリ。▲願(ハク)は蒸(平)黎(平)を哀ムて以(チ)て大悲を起(サ)ム(ト)。覺(人名)乃(チ)香を焚(キ)て遙に潭(平)洞を望(ミ)て〔而〕▲祝(リ)て曰(ハク)、惟(龍)〔之〕雨ヲ爲(ル)コト、澤ホヒ其レ滋シ。滋(シカラ)不(ス)澤(ホハ)不(ス)龍孰をか徳と爲(ム)〔ト〕。頃刻(ナラ)

13ウ

- 4・5 ▲不(ル)に、雲霧四(モ)に起(リ)て甘(平聲)澤大に下(ル)。是の歳、年有(リ)。覺(入名)▲  
 法(ニ)入(リテ)自(リ)以(リ)來、常に四十九願を發す。其の一願者願(ハク)は大悲の菩薩に由  
 (リ)て彌陀を▲接見(セ)ム(ト)。「於」是に檀度を鳩メ率キて大悲の像を鑄ル、高(サ)四十九  
 6 ▲尺。寺を造(リ)て居(レ)フ「之」。寺(ノ)「之」成(ル)に及(ヒ)て盛(ニ)佛事を陳ス。大悲  
 7 の前に於て府伏(フ)て▲泣(キ)て曰(ハク)、聖相已(ニ)就(リ)ヌ 梵字「宇」已(ニ)成(リ)ヌ。  
 8 願(ハク)は聖力ヲ承(リ)て早(ク)安養に發(登)「ラ」ム(ト)。其の▲夜(ニ)三更に忽に祥光ニ  
 9 道有(リ)テ、金色の光を作す。光の中に阿彌陀佛、▲雲に乗(リ)テ「而」下(ル)、觀音、  
 2 勢至、左右に隨(フ)「之」。佛金臂を乘(リ)て覺(入名)か首を按(テ)て▲曰(ハク)、願ヲ守(リ)テ「  
 3 而」て憐(ム)ルコト勿(レ)、利物を先と爲(ヨ)寶池(ノ)生處、孰(カ)願(ノ)如(ク)ナラ不(ラ)ム  
 4 (ト)。俄(ニシ)て「而」▲光收(リ)雲劍(リ)て杳(ト)ト(シ)て朕(去聲)迹(入聲)无(シ)。後十一年  
 5 七月の望ノ夕に復(一人)を見(ル)。雲(ノ)間に▲於て半身を現(ス)毗沙門の狀(ト)若(ル)コト有  
 6 リ、俯(シ)て覺(入名)に謂(ヒ)て曰(ハク)、安養(ノ)「之」▲期、「於」斯(ニ)至(リ)ヌ「矣」。  
 即日覺(入名)所見を以(チ)て弟子ニ「告(ケ)テ」訓(フ)ラク、其(レ)精勤▲勇猛(シ)て  
 如來の法に於て懈墮を生(スル)こと无(カレト)。既(ニシ)て「而」大悲の前に於て跌(ヲ)加  
 (ヘ)て識を化(ス)。

- 7・8 ●▲釋懷玉(ハ)舟丘(ノ)人(ナリ)。緬(シク)淨業ヲ想(フ)コト、僅(カニ)四十年。日に彌陀佛の▲  
 9 號を誦(スル)こと五萬遍、諸經を通誦(スル)こと、三百萬卷(ナリ)。唐の天寶元年六月▲九日

14ウ

- に、玉「人名」佛を念（シ）て忽に見（ル）、西方の聖衆、數恆河沙の若（キラ）。中に一人有（リ）、手に銀臺を▲擎（ケ）て前（ミテ）〔而〕玉「人名」に示ス。玉「人名」に曰（ハク）、懷玉「人名」か如き者は本（ヨリ）金臺を望（ム）。何爲レソ▲銀臺至レル（ヤト）〔耶〕。言發シテ臺隱（レ）ヌ 人（モ）亦現（レ）不（ス）玉「人名」〔於〕是ノ後ニ、彌（イライキヨ）▲精苦を加（フ）。既に三七日、向ニ〔之〕銀臺を擎（ケ）タ（リ）シ者復來（リ）テ告（ケ）て曰（ハク）、法師精▲苦を以（チテ）の故に上品に陞（ル）こと得タリ（ト）。又曰（ハク）、上品往生は必（ス）先（ツ）佛を見（ル） 宜（シク）跌坐（シ）て以（チ）て佛を▲俟ツ可（シト）〔也〕。未（タ）踵（クヒス）を旋（サ）《未》ル、閒（ニ）、異光室を照（ス）。玉「人名」乃（チ）手を以（チ）て人を約（入懸）（シ）て曰（ハク）、宜（シク）此の光明に▲觸（ル）《宜》（カラ）不 吾之を蹈ムて〔而〕去（ラ）ム（ト）欲（ト）。又三曰ア（リ）て異光再ヒ發す。弟子▲其（ノ）世を謝（セ）ムコトヲ疑（ヒ）て環リ繞（リ）テ問フ〔之〕。玉「人名」か曰（ハク）、其の時に非（スト）〔也〕。又曰（ハク）、汝徒、若（シ）異▲香を聞（カ）は我（カ）報（ヒ）即（チ）盡（キ）ナム（ト）。次の日弟子慧命「人名」か曰（ハク）、此（ノ）報（ヒ）必（ス）盡（キ）て復（ツ）何の▲國に於て以（チテ）生を受（ケムト）〔也〕。玉「人名」答（ヘ）不（ス）惟六句の偈を書（シ）て云（ハク）、清淨皎潔（ニシ）て塵▲垢无（シ）、蓮華ヨリ化生（シ）て父母と爲（ス）。我十劫を経て道（ミチ）を修（シ）て來レリ、出（テ）テ閻浮（ヤムブ）に示（シ）て▲衆苦を厭フ、一生の苦行十劫に超（ユ）。永（ク）娑婆を離（レ）て淨土に歸（ラム）ム（ト）。偈畢（リ）て香▲氣四（モ）に來ル。弟子（ノ）中に佛（ト）ニ菩薩與（ト）の、共に金臺に御ス（ル）ヲ見（ルモノ）有（リ）玉「人名」の▲傍に千百（ノ）

15オ

化佛ア(リ)て西(ヨリ)下(リ)、玉<sup>レ</sup>人名を迎フ(ト)。玉<sup>レ</sup>人名恭ムテ掌(ヲ)合(セ)て笑  
 を含(ミ)て(而)歸(ス)

- 5 ▲唐朝ノ觀(平)察(入懸使(上)韋(平)文晉(入名行ヲ立(ツ)ルコト孤(平懸潔ナリ。常に西方道場  
 を建(テ)て▲阿彌陀佛を念(ス)。佛(佛)の前(ニシ)て願を發(シ)て西方に詣(テ)て菩薩の  
 道を行(ヒ)佛▲法を守護(シ)法輪を轉正(シ)て廣(ク)含識を度(セム)と志(ス)。六月ノ内  
 に至(リ)て面西に向(ヒ)て加趺合掌(シ)て▲阿彌陀(佛を)念(スル)こと六十聲(ナリ)。  
 9 忽然と(シ)て(而)化(ス)。異香宅に滿(チ)内外皆聞(ク)。種▲種(ノ)祥瑞、稱(テ)説  
 (ク)可(カラ)不<sup>ナ</sup>

- 1 ▲長安の李知(平)遙(平)(ハ)淨土教主ニ善シ。念佛ノ衆ニ會(ヒ)テ<sup>テ</sup>師範(ト)爲(ス)後<sup>ニ</sup>に疾  
 2 に▲因(リ)て忽に云(ハク)、念佛和尚來(ルト)。水を命(シ)て衣ニ著ク 香爐ヲ索メテ<sup>テ</sup>  
 3 堂を出(テ)て▲空に向(ヒ)て頂禮(ス)。乃(チ)空聲の説を聞(ク)。偈(ニ)曰(ハク)、汝  
 4 李知遙(入名)に報す 功成(リ)て果自(ヲ)招ク。君を▲引(キ)て淨土に生(セム)、爾ヲ將キ  
 テ<sup>テ</sup>金橋に上ラム(ト)。却(リ)テ<sup>テ</sup>扶ケテ<sup>テ</sup>床に就(キ)て坐(シ)て(而)逝(キ)  
 5 又。衆▲異香を聞ク  
 6 ▲唐の信士鄭(去)牧(入懸濁)卿(平懸)(ハ)榮(平陽)(ノ)人(ナリ)。家(ヲ)舉(ケ)て佛に奉(ス)。  
 7 母及(ヒ)姉妹、同(シク)淨方を▲祈ル。父明(入名)太廟の令に任す。舅(去)蘇(平懸)頌(上)人名  
 8 禮部尙書タリ。牧卿(入名)▲少子ナリ 儒生爲リ。兼(ネテ)佛理を崇フ。冠(平懸)冕(上濁)を顧(ミ)

16オ

- 9 不<sup>ス</sup>心を息<sup>(ハク)</sup>(メテ) 觀に禪(ス)。▲密嚴經を誦(シ)て安養國に生(レム)ことを願(フ)。開元二  
 1 十二年に至(リ)て疾に因(リ)て困(ミ)篤(シ)。醫人、及(ヒ)同道(ノ)者<sup>(シヤ)</sup>▲有(リ)て咸<sup>(シヤ)</sup>  
 2 勸メ諭<sup>(サト)</sup>シテ<sup>(テ)</sup>言(フ)、具(ニ)魚肉を進メて以(チ)て羸<sup>(平)</sup>頓<sup>(去)</sup>を救<sup>(ラ)</sup>ムて<sup>(テ)</sup>痊<sup>(平)</sup>▲復  
 (フ)〔之〕後、淨戒を修持(スル)こと亦可(ナラ)不<sup>ス</sup>(ヤト)〔乎〕。牧卿<sup>(入色)</sup>曰ハク、噫<sup>(ア)</sup>此(ノ)  
 3 如(キ)、浮生縦ヒ薰<sup>(入)</sup>韃<sup>(去)</sup>に▲因(リ)て〔而〕痊平を得(タ)リトモ。終(ニ)磨滅に  
 4 歸(シ)ナム 佛ノ禁制ニ奉セ不。而(シテ)微▲命を惜(ミ)テ<sup>(テ)</sup>何ニカ爲ム(ト)。確<sup>(入)</sup>  
 5 然と(シ)て許(サ)不<sup>ス</sup>。遂<sup>(ス)</sup>に佛事を嚴(カニ)ス 手に香爐を執(リ)て一心に阿▲彌陀佛を稱  
 6 す。復<sup>(ア)</sup>是の言を作(サ)ク、丈夫 一心不退(ニシ)て西方に往生(セム)ことを願フ(ト)。奄  
 7 然と(シ)て長(ク)▲往ク、異香庭院に充<sup>(平)</sup>韃<sup>(入)</sup>蔚<sup>(入)</sup>タリ。隣里同(シク)知レリ。舅氏、夢  
 8 (ミ)ラク寶池ニ華▲敷ケテ牧卿<sup>(入色)</sup>カ掌(ヲ)合(セ)て趨リ上ルヲ見ル(ト)。時ニ五十九に當レリ  
 9 ▲釋齊翰(ハ)吳興ノ沈<sup>(上)</sup>氏ノ子(ナリ)。少キ時に寺に遊(ヒ)て高靜<sup>(去)</sup>無<sup>(平)</sup>塵<sup>(平)</sup>〔之〕  
 1 〔之〕地を踏ムて側<sup>(入)</sup>韃<sup>(入)</sup>▲然と(シ)て宿命(ノ)〔之〕知有(リ)。而(シテ)往世(ノ)〔之〕生處、  
 炳<sup>(上)</sup>と(シ)て目に觀(ル)か如(シ)。因(リ)て家を捨ツ〔焉〕。▲翰<sup>(入色)</sup>性(ハ)時に徇<sup>(シ)</sup>ハ  
 2 不<sup>ス</sup>。善ク名ニ近(ツ)カ不。毎(ニ)一室に處(シ)て寂トシテ人无(キ)か如シ。惟<sup>(去)</sup>其(レ)苦  
 3 ▲學(シ)て寸陰を棄(テ)不<sup>ス</sup>。法華(ノ)諸經、律部を通(シ)て精<sup>(平)</sup>敏<sup>(上)</sup>〔之〕  
 4 (ケ)无(シ)。▲勝業を推シ明(ラカニシ)て後進を梯<sup>(去)</sup>引<sup>(上)</sup>す。嘗(テ)吳興の皎然<sup>(入色)</sup>に  
 5 謂(ヒ)て曰(ハク)、我(カ)所見を盡ク(シ)て▲彼の所聞ニ資(セム)。一毫(ノ)〔之〕善、

16ウ

- 5 竝(ヒ)に淨土に歸す(ト)。十年に疾に邁(ヒ)て流水(ノ)▲念佛道場に入(リ)て淨土の境象、  
 6 一念に頓に現す。翰(入名)道場を出(テ)て偈を作(リ)て▲曰(ハク)、流水動(キ)テ(兮)波漣  
 7 (平)漪(平)整タリ、芙蓉(平)相(ヒ)照シテ(兮)寶光隨フ 光ニ乘(リ)て以(チテ)▲邁ク(兮)  
 8 偕ナル者ハ誰ソ(ト)。是の日(于)虎丘(ノ)之(之)東寺に終(リ)ヌ。初(メ)翰(入名)道場▲  
 出(テ)て偈を作(リ)畢(リ)て弟子に謂(ヒ)て曰(ハク)、善ハ捨(ツ)可(カラ)不(時)ハ  
 9 失フ可(カラ)不(汝)曹(能)▲能(ク)安養(ノ)之(之)善(ヲ)固(メ)ム(ヤト)「乎」。弟子か  
 1 曰(ハク)、孰(カ)敢(ヘテ)之を忘レム(ト)。翰(入名)曰(ハク)、佛道▲忘(レ)不(汝)カ  
 徳由昌(リ)ニセリ(ト)。或(ル)ヒト問(ハ)ク 和尚生ヲ捨ツ 何處(レ)ソ 病ム(ト)「耶」。  
 2 翰(入名)曰(ハク)、必謝(ノ)之(之)▲期(ハ)、聖と雖(モ)未(タ)免(レ)《未》。況(ムヤ)  
 吾レ(ヲ)ヤト「哉」。[於]是に廻(リ)て聖像を瞻(シ)て倏然と(シ)て(而)絶(エ)ヌ  
 3・4 ▲釋神皓(ハ)器宇軒(平)轡(入)轡(ト)シて風采朗邁(キ)ナリ。天寶六年に詔下(リ)テ▲郡毎二僧  
 5 三人を度ス。其の名節道業ノ人に出タル者ヲ推(シ)て薦ス(之)。皓(入名)本▲郡に於て薦(キ)ノ首  
 6 爲(リ)。尋(ネ)テ會稽の曇一師(入名)に依會(シ)て精(シ)ク律部を窮ム。已(リ)て(而)▲  
 7 歎(シ)て曰(ハク)、律部(ノ)防(ク)所ハ、蓋シ諸(レ)繩(ス)ノミ。今(ノ)之(之)僧徒、本を  
 8 捐(テ)テ(未)を逐フ。能(ク)已(ヲ)▲繩(ス)者ハ未(タ)始メヨリ聞(ク)コト有(ヲ)《未》。  
 吾レ誰カ區(平)轡(區)トシテ(未)譏(リ)を衆人に取(ラ)ム(ヤト)「哉」。乃(チ)包山の▲  
 福願寺に歸(リ)て逍遙自得ナリ。士人、其(ノ)志(ノ)尙(ナル)を高(シトシテ)從(ヒ)

17ウ

- 9 テ〔之〕游〔ハム〕コトヲ樂フ。末の年西方の法社を締（去）▲結〔シ〕て以〔チテ〕道俗ヲ發〔ス〕。
- 1 其の閑ニ塵慮を遺（去）〔テテ〕以〔チテ〕六▲根を淨〔ムル〕こと能〔ハ〕不〔ル〕者多ク引〔キ〕テ
- 2 退ク〔焉〕。時の人、以（レ）爲〔ヘラク〕梅檀〔ノ〕林の中に常材自〔ラ〕枯ルト。眞▲元六年十月に
- 3 疾に邁〔フ〕。十二月五日に弟子惟亮〔入名〕に囑〔シ〕て曰〔ハク〕、吾▲今夕〔ニ〕於て必〔ス〕亡
- ナム。淨土ニ生〔レム〕と願フコト〔而〕期至レリ〔矣〕。汝宜〔シク〕九品を班（平懸）列〔入懸〕〔シ〕
- 4 て我か爲メニ前▲導〔セ〕ヨ〔ト〕。其の夕淨土の兆（去）朕（去）、密に〔于〕前に現ス。皓〔入名〕乃〔チ〕
- 5 身ヲ澡（去）ヒ、衣〔ラ〕易〔ヘ〕て以〔チテ〕終〔ル〕。▲後三日、所居〔ノ〕〔之〕室、香氣滅〔セ〕不（去）
- 6 ▲釋少康〔ハ〕縉雲仙都〔ノ〕人〔ナリ〕。母〔ハ〕羅氏、夢〔ミラク〕、鼎湖（平）ノ峰に遊〔ヒ〕
- 7 て玉女の青蓮華を▲捧〔ケ〕て之に授〔ク〕ルヲ得タリ。且〔ツ〕曰〔ハク〕此〔ノ〕華〔ハ〕、吉
- 8 祥ナリ 之を〔於〕汝に授〔ク〕 當に貴▲子を生〔ム〕《當》〔シト〕。康〔入名〕を生〔ム〕日に及〔ヒ〕
- 9 て青光室に滿〔チ〕て香芙蕖（平）に似タリ。年十有五〔ニシ〕て▲法華、楞嚴等の經五部ヲ誦ス。
- 1 尋〔ネテ〕毘（去）陀を學〔ヒ〕究ム 及〔ヒ〕華嚴、▲瑜伽、諸論を聽〔ク〕。眞元の初〔メ〕に洛下の
- 2 白馬寺に至〔リ〕て殿内を見〔ルニ〕文字累リニ光明を▲放ツ。康〔入名〕測〔ル〕こと能〔ハ〕不〔シ〕
- 3 て前〔ミ〕て〔而〕探〔リ〕テ取ルニ（入）〔之〕 乃〔チ〕善導〔入名〕か昔爲レル西方▲化道〔ノ〕
- 4 文〔ナリ〕〔也〕。康〔入名〕か曰〔ハク〕、若〔シ〕淨土〔ニ〕於て緣有〔ラ〕は、當に此の文を使て光
- 4 明再〔ヒ〕發〔セシ〕メム〔ト〕。所▲願、未〔タ〕已〔マ〕《未》〔ルニ〕、果〔シ〕て重〔ネ〕テ
- 閃（去）爍（去）〔入懸〕ナリ。康〔入名〕か曰〔ハク〕、劫石は移シツ可〔シ〕、〔而〕我〔カ〕〔之〕願は易ルコ

18オ

- 5 ト无(ケ)ム(ト)〔矣〕。▲遂に長安の善導「入名か影堂に之(キ)て大に薦(キ)獻を陳ス。方に薦
- 6 獻を陳(スル)時ニ、倏ニ善導「入名か遺像ヲ▲見ルニ、〔於〕空中に昇(ル)。康「入名に謂(ヒ)て
- 7 曰(ハク)、汝吾か事に依(リ)て▲有情を利樂ス。則(チ)汝(カ)〔之〕功(ナリ) 同(シク)
- 8 安樂〔養〕に生(マレ)ム(ト)。康「入名其(ノ)語を聞(キ)て證(スル)所有(ル)か如シ。南  
〔ミセケチ〕
- 9 (ノカタ)江陵の果願寺に▲適クニ路に一僧に逢(フ)。謂(ヒ)て曰(ハク)、汝人を化(セム)と  
欲は當に新定に往(ク)《當》(シト) ▲言(ヒ)訖(リ)て〔而〕隱(レヌ。睦(入聲濁)郡に到(ル)ニ
- 1 泊(オモ)ムて睦人尙識ル者无(クシ)て未(タ)其(ノ)化に従(ハ)《未》。康「入名乃(チ)錢を▲囚  
フて小兒を誘掖(シ)て與へテ〔之〕約(シ)て曰(ハク)、阿彌陀佛(ハ)實に汝か良導(ナリ)。
- 2 能(ク)一聲を▲念(セ)は汝に一錢を與(ヘ)ム(ト)。小兒其(ノ)錢を得(ム)コトヲ務(メ)て
- 3 〔也〕隨(ヒ)て亦念(セ)す〔之〕 後▲月餘を經ルに孩(平濁)孺(去濁)ノ佛を念(シ)て錢を俟(ツ)者比
- 4 〔上〕ト比タル皆是レナリ。康「入名か曰(ハク)、十聲を念(ス)可(シ) ▲乃(チ)爾に錢を與
- 5 (ヘ)ムと 小兒亦其(ノ)約(ノ)如(クス)。是(ノ)如(キコト)、一年、長、少、貴、賤(ト)
- 6 无クマ(シ)凡(テ)▲康「入名を見(ル)者(ハ)則(チ)阿彌陀佛と曰(フ)。故を以(チ)て
- 7 念佛(ノ)〔之〕人、道路に盈(テ)リ〔焉〕。眞元▲十年に康「入名烏籠山に於て淨土(ノ)道場を
- 8 建(テ)檀(ヲ)を築(ク)こと三級(ナリ)。人を聚(メ)て▲午夜に行道(ス)。道場ノ時毎(ニ)、康
- 9 「入名自(ラ)座に登(リ)て男女を令て康「入名に面(フ)て▲聲ヲ廣(ク)イテ高ク阿彌陀佛を唱(ヘ)
- シム。已(リ)テ又聲を廣(キ)て之ヲ和(ス)。康「入名か唱(ス)ル時に至(リ)て衆見ルニ▲一佛(ノ)、

19オ

- 其(ノ)口從(リ)出ツ。【イ、▲一佛(ノ)、其の口從(リ)出(ツル)に見(ズ)連(連)唱スルコト十聲(ナ)レハ則(チ)十佛(ノ)有スコト、珠ヲ聯ネタル狀ノ若(シ)。康(人名)か曰(ハク)、▲汝佛を見(ル)ヤ)否(ヤ)。如シ佛を見ツラ(ム)者は決シテ淨土(ニ)生(レ)ム(ト)。其(ノ)佛を禮スル人數千。亦▲竟に見不(ル)者有(リ)。眞元か二十一年十月三日、道俗に囑累(ス)ラク。當に▲安養に於て増進の心を起(ス)《當》(シ)。閻浮提に於て厭離(ノ)心を生(ス)ヘシ(ト)。又曰(ハク)、汝曹此の時、能(ク)光明を▲見は眞の我(カ)弟子(ナリト)。遂(ニ)異光數道を放(チ)て庵と(シ)て世を棄ツ〔焉〕。塔に▲臺子殿に入(ル)。天臺の徳韶禪師(人名)重(ネ)テ新夕(ニ)ス〔之〕。今(ノ)〔之〕人、多(ク)其(ノ)塔を指(シ)て後の善導(人名)と▲爲す〔焉〕
- 7 ▲釋知玄(ハ)眉(平濁)州洪(平)雅(ノ)人(ナリ)。母夢(ミラク)、月懷に入ルト 因(リ)て〔而〕載チ誕セリ。乳(去)哺(平)〔之〕〔之〕に聞、佛を▲見て輒ク喜フ。五歲(ニシ)て祖(オホセ)華を詠(セ)令ム。聲に應(シ)て〔而〕就(キ)テス。七歲(ニシ)て泰法師(人名)の寧夷寺に▲在(リ)て涅槃經を講(スル)に遇(ヒ)ヌ。玄(人名)講肆に入(リ)て前因を觀(ル)か若(シ)。是
- 1 の夕、夢(ミ)ラク、▲佛手をモて其の頂に案(オ)ヘタマフト。遂(ニ)出家(ス)〔焉〕。丞相杜(去)元
- 2 穎(上)〔人名〕西蜀に鎮(ウ)作り。▲玄〔人名〕か〔之〕名を聞(キ)て講を〔于〕大慈寺の普賢閣の下に命す。
- 3 黑白(ノ)〔之〕衆、日に合(リ)テ▲萬數(ナリ)。注(平)聽(シ)て心ヲ傾ク。駭(去)歎(シテ)
- 4 已(ム)こと无(シ)。其の後蜀人、敢(ヘ)て其(ノ)名を指(サ)不。▲乃(チ)本ノ俗姓モて
- 5 陳菩薩と號す〔焉〕。外典の經籍、百家(ノ)諸子、該ネ總ヘ▲不(ル)こと莫(シ)。毎に恨(ム)

19ウ

- 6 ラク郷音變(セ)不(シ)て講實に堪(ヘ)不(ル)ことを。乃(チ)象(去)耳(上濁)▲山に於て大悲の咒を誦す。一夕に玄夢(ミ)ラク、神僧舌を截(リ)て換フ(ト)「之」。明日に俄に秦
- 7 ▲音ニ變(ス)。時に楊刑部ノ汝士高「人名」左丞元裕(祐)「去」「人名」(裕)入聲長安ノ楊魯士「人名」咸ク其(ノ)▲門に造(リ)蓮社を結(ハム)と擬す。會昌に僧門を簡(上)汰(去)ス。玄「人名」巴(平聲)岷(上濁)の舊山に歸(リ)ヌ。巾櫛を▲例施(セム)と雖(モ)、「而」戒檢(イヨイモ)愈更に明潔(入聲)ナリ。宣宗「人名」の誕(去濁)節(入聲)ニ玄「人名」に詔(シ)て▲例施(シ)論議(セ)シム。玄「人名」奏(ス)ラク、天下ノ廢寺、宜(シク)再ヒ興復ス《宜》(シト)。大に梵刹ヲ興スコト玄「人名」(ニ)▲力有(リ)「焉」。帝「人名」玄「人名」に才識有(ル)を以(チ)て特に深ク顧(去)矚(入聲)ス。工に命(シ)て形を圖(去)「キ」て「于」禁▲中(顛倒)に置(ク)。時に相國裴(平)公休(平)「人名」(ト)玄「人名」與友(ト)シ(テ)善シ。亦相(ヒ)激(入聲)揚(平)シテ教法を中興ス。▲帝「人名」悟達國師(ノ)「之」號を賜フ。玄「人名」臥中に於て生平に曾(去)遊(ヒ)シ▲「之」境を見ル。歷然と(シ)て前に在リ。因(リ)て起(キ)て香を焚(キ)て西に向フ。他境(ノ)象(ト)雖モ、皆▲其の志に非ず、如シ一(ニ)淨土を見(ル)こと得は志願滿(チ)ヌ「矣」。言(ヒ)已(リ)て空中に聲有(リ)テ「て應(シ)て▲曰(ハク)、汝(ノ)「之」行業、決シテ安養に生レム。奚ソ願滿(タ)不と爲ル(ト)「也」。玄「人名」聞(キ)て「之」喜躍シテ▲自ラ慰ム。遂に弟子慈燈「人名」を召(シ)て遺表を上(ツ)ル。仍(チ)燈「人名」に謂(ヒ)て曰(ハク)、吾淨土(ノ)「之」▲修、年有リ「矣」。今日(ノ)「之」

- 聞、我か昔願(ノ)如(シト)。已(リ)て乃(チ)右脇(ニシ)て席に著(キ)て「而」化(ス)
- 1 ●釋僧藏(ハ)西河(ノ)人(ナリ)「也」。性ヲ賦(去)スルコト謙損(ニシ)て物與(ト)競(ハ)
- 2 不。耆年を見(レ)は則(チ)▲敬ス「之」。有德(去)ニ遇(ハ)は則(チ)尊トフ「之」。門を出(ツ
- 3 レ)は徧ク塔廟を禮す。道俗の拜を受(ケ)不。▲夏の月は常に草の閒(ニシ)て蚊(平濁)蚋(去濁)
- 4 ニ饒(カ)フ。凡(テ)勞苦を涉ルコト必(ス)衆の先に居り。彌陀▲佛を念(スルコト)二十許(リ
- ノ)年(ナリ)。未(タ)嘗(テ)口に非惡ヲ言ハ《未》。毎に以(ヘラ)ク速に三界を出(ツル)
- 5 こと念▲佛ヨリ先ナル(ハ)无シ(ト)。故を以(チ)て行シテ坐ヲ遺(去)ルルカ若シ。飲食寢息ヲ
- 6 忘(ル)ルカ若(ク)、安養(ノ)「之」志▲焉(去)ニ在り。乾(平符)符(平)ノ中に病に臥(去)ス。(病
- 7 中に諸天の樂を奏(スル)を聞(ク)次第(ニ)來迎(シ)て皆去ラ▲不。乃(チ)淨土の化佛
- 8 の光ノ其(ノ)身を照(ラス)を見(ル)。侍疾の者、藏(入名)カ「之」▲側(ニ)在(リ)。藏カ曰(ハ
- ク)、自(ラ)、惟レ塵劫ヨリ以(チ)テ今日に至(ル)マテ「リ」て積(ム)所(怨(平輕)尤(平)重、
- 9 微塵數の如(シ))。▲豈(ニ)意(ヒ)キヤ、今日聖衆(ノ)光吾カ身を燭(去)スコトヲ。此(レ)
- 1 眞に淨土の教主ノ大悲(ノ)▲我を構(フル)こと爾リ(ト)。次(ノ)日、又僧に謂(ヒ)て曰(ハ
- 2 ク)、吾適(去)目(カ)を冥(サ)は、正(ニ)淨土に在(リ)て諸(ノ)上善に接(セ)ム(ト)。▲又曰
- (ハク)、諸(ノ)上善(ノ)人、咸(去)吾(ミチ)カ來(ル)コトを樂フ。且(ツ)吾等カ與(去)ニ華を散す(ト)。
- 3 未(タ)▲食頃を逾(エ)《未》(ル)に又曰(ハク)、諸(ノ)上善(ノ)人、我を召(去)フ。(我
- 4 レ其レ去(リ)ナム(ト)「矣」。乃(チ)起(チ)て衣を整(ヘ)て西に向(ヒ)て▲「而」終(ル)

5・6 ▲隋州の約山の翁(乎)媪(乎)二人は苦空を識達す。毎二月の六齋日(二)山僧▲二人を請(ヒ)て

7 齋を設(ケ)て行道念佛(ス)。常に阿彌陀佛を念(ス)。命終(ノ)時(二)臨(ミ)、光▲明室に

滿(ツ)。半夜(ニシ)て日中の如(シ)。又女裴(乎)氏(入名)貞觀年中に僧(ノ)教に因(リ)て

8 ▲佛を念す。小豆を用(キ)て數と爲す。念三石に滿テリ。自(ラ)生處を知(レ)。徧(ク)親知を

9 辭す。▲後に法ノ如(ク)、裝飾(シ)て佛を念(シ)て(而)終(リ)て極樂に往生(ス)。又汾陽

1 縣の老人、貞觀五年に法忍山に於て一の空房を借(リ)て止宿(ス)。常に阿彌陀佛を念(ス)。

2 命終(ノ)時(二)▲臨(ミ)、大光徧照す。西に面(ヒ)て蓮臺に登(リ)て(而)去(ル)

3・4 ▲元子平大曆九年に九澗州の觀音寺に於て心を發(シ)て阿彌陀佛を念(ス)。三月を経て忽(二)

5 病ス。夜。空中の異香、音樂を聞(ク)。空中に人有(リ)て▲告(ケ)て言(ハク)、麤樂已に過

6 (キ)て細樂續(キ)來ラム。日を経て佛を念す。命終に的(シク)淨土に▲生す。數日異香絶(エ)不

7 ▲釋雄俊(ハ)成都(ノ)人(ナリ)也。膽(上)勇有(リ)て戒行无(シ)。而(トモ)天性講説

8 に善(シ)。▲或(ル)時は講肆に財幣(去)を得ハ必ス也。非法に(シテ)(而)用ル。蜀人、之

9 を鄙(ミ)て以(チ)て▲壞道沙門と爲(ス)也。亦嘗(テ)僧を罷(メ)て以(チテ)軍壘(上)に

1 入(ル)。尋(テ)因(リテ)難を逃(ル)ルニ(レ)復(ヤシ)僧門に▲入(ル)。僧徒名節を守り未

2 然を防ク者有(リ)て多(ク)畏(レ)て避ル(之)。俊(入名)▲經二一(夕)ヒ阿彌陀佛を念(ス)

3 レハ即(チ)五十億劫の生死(ノ)罪を滅すと稱(スル)を聞(キ)テ(乃)大に喜

(ヒ)て曰(ハク)、此レ有ルコトヲ頼ム(ト)耳。故に非を造(ルト)雖(モ)(而)口轍(ハヤ)ク佛

- 4 を念(ス)。然(シテ)其(ノ)▲念(スル)所、存(スル)か若(ク)、忘(ルル)か若(シ)。伶  
 5 (平)倫(平)(ノ)「之」戲(ト)樂ヲ「イ」を爲(ス)か猶ク爾(リ)。唐の大曆▲二年二月五日に、暴二  
 亡(シ)て冥府に入る。王曰(ハ)ク汝を追(ヒ)て「之」來ルコト誤テル(ナリ)「也」。然(レ  
 6 トモ)汝(ノ)▲「之」惡其(レ)積ルコト尤(モ)大ナリ宜(シク)塗(平)炭(ト)ヲ「イ」を略經  
 7 (ス)可(シト)即(チ)牛頭(ノ)獄卒▲數人を令て驅(リ)て地獄に入(ラ)《令》(ム)。俊  
 8 「人名獄門に至(リ)て且ハ拒ミ且ハ捍キ且ハ大ニ呼フ、曰(ハク)、一(タヒ)阿▲彌陀佛を念(ス)  
 9 ルニ猶(トホ)五十億劫の生死の重罪を滅(ス)。況(ムヤ)俊(人名)(ノ)造(ル)所、未(タ)▲五逆に  
 臻(ラ)《未》未(タ)十惡ヲ形(サ)《未》。又其(ノ)念佛時トシテ且ク(モ)忘(レ)不(ス)  
 1 若(モ)佛語▲憑ム可クハ、豈(ニ)更(ニ)塗炭に膺ル合ケムヤ(ト)。因(リ)て復大(ニ)呼(ヒ)、  
 2 左(ニ)驥(ト)シ、右(ニ)驥(ス)「焉」。數▲卒顧(ミ)て敢(ヘ)て凌(平)逼(入)輕(セ)不  
 3 コト「者」久シ(之)。乃(チ)其(ノ)語を以(チ)て王に報(ス)。ト俊(人名)を召(サ)令  
 4 (ム)。▲俊(人名)至ル。王の曰(ハク)、汝(ノ)「之」念佛、本(ヨリ)深(キ)信无(シ)。但其(ノ)  
 5 身口に因有(リ)。汝世に廻(リ)て更に初心を勵ム▲可(シト)。俊(人名)既に回ルこと得て屢  
 6 所見を言フ。時に滑(入)輕(平)稽(平)稽(平)の輩▲戲(テ)「之」以(チテ)地獄漏(毛)網の人と爲ス。俊(人名)  
 7 か曰(ハク)、以(チテ)戲と爲ル母レ(ト)。今(ニ)由(リテ)「而」後自(ラ)▲過を知ルコト  
 8 爾(リ)。乃(チ)郡南(ノ)「之」西山に之(キ)て情を洗ヒ意を滌(ス)「キ」て專(ラ)念佛を事(ト)  
 9 す。▲四年三月七日、俊(人名)か「之」朋(平)儕(平)七人、西山に之(キ)て訪フ(之)。俊(人名)喜

8 (ヒ)て曰(ハク)、▲吾レ時至(リ)タリ[矣]。汝<sup>チ</sup>徒<sup>チ</sup>又來(レ)リ。其(レ)亦緣遇フコト有(リ)テ<sup>マ</sup>て[而]事託クコト有(ト)。▲又曰(ハク)、汝徒廻(リ)去ネ。若(シ)城中の親知を見ハ俊[人名か爲(ニ)語(リ)て曰(ハ)マク、俊[人名念佛の▲功德ヲ以(チ)て淨土に生(ルル)こと得(タリ)。他日俊[人名を以(チ)て地獄(ノ)人と爲(ス)こと母レ(ト)[也]。語笑(ノ)[之]間(ニ)、▲坐(シ)て[而]世を棄(ツ)

3 ▲汾州(ノ)季(主)祐(毛)(ハ)牛を殺(スコト)を業と爲(ス)。病ノ重キ時に臨(ミ)て數頭の牛を見(ル)其(ノ)身に逼メ▲觸ル。妻に告(ケ)て曰(ハク)、僧に請(ヒ)て我を救へ(ト)。僧至ル告(ケ)て云(ハク)、觀經の中に臨▲終の(トキ)十念シテ[而]往生を得ルコトヲ説(ク)。遂に聲に應(シ)て佛を念(ス)。忽<sup>チ</sup>爾トシテ異香室に滿(チ)て▲便(チ)終(ル)。衆人皆見(ル)、異香、瑞色(ノ)祥雲、其の室の上に繞ル(ヲ)。又▲張(平)整 鍾(平) 馱(平) [人名(ハ) 同州(ノ)人(ナリ)。鷄を販(ク)コト)を業と爲(ス)。永徽九年に終(リ)に臨(ミ)て字の▲南を見ルに群鷄集(レ)リ。忽に一人を見ルニ緋(平)整 阜(毛) (ノ)衣を著タリ。鷄を驅(リ)て唱(シ)て言(ハク)、啄(ス)▲<sup>々</sup>(啄)(ト)。其(ノ)鷄四モに交(リ)上(リ)て兩の眼を啄ム 血を出(シ)て床に在(リ)。酉(ノ)時に至(リ)て善光▲寺の念佛の僧導[人名に値(フ)。聖像を鋪(セ)令(メ)て阿彌陀佛を念(ス)。忽に異▲香を聞(キ)奄然と(シ)て[而]逝(ク)

3 ▲釋太行(ハ)泰山に於て草を結(ヒ)て衣を爲(ス) (リ)、果木を採(リ)て食(ト)爲(ス)。法華の▲普賢の懺(ヲ)行(フ)。三年を積(ミ)て精誠既に極(マリ)て且(ツ)普賢の身を現(ス)

紙裏  
返し見

- 5 ことを感す。行入名自ラ ▲瞻アハり睹テ去テテ彌イコトモ 夙因を慶フ。是に由リテ諸ノ念を策勵す。如來ノ「之」法の尙存スルことを念ヒ、▲已リテ「之」修ノ未タ證セ《未》ルことを念フ。早上暮去激去切ニシテ飲食を忘ルルに迫フ。未の年ニ以ハク佛道の修スル所▲未タ一境を專ラニセ《未》ト。又以ハク 幻身无常ニシテ必ス磨滅に歸ス 未タ知ラ《未》來世ニ復何クニカニ生を▲受ケムコトヲ。遂に於大藏に誠を追ヒ意を叩イテ以チテ陳露シテ曰ハク、願ハクハ我カ信心▲彼ノ經文を取リ其ノ所得に隨ヒテ即チ永ク受持セムト。乃チ其ノ意ヲ縱マニシテ抽イテ而▲之を取ル。其ノ所得ノ者ハ乃チ彌陀經ナリ。日夜に誦持シテ安養に絡入繹入す。未タ三▲七日ニナラ《未》ルに、俄ニ半夜に於テ琉璃の地を睹ル 瑩イサキキ淨ヨクシテ前に在リ。行入名心眼洞▲明と覺ユ 彌陀佛ト、觀音、勢至與ト、無數ノ化佛を見ル。于テ時に遠近▲相ヒ傳ヘテ事停平聲 宗皇帝入名に聞ス 帝詔シテ内に入ラシメテ其の所見ヲ問フ。行入名具ニ對フ「之」。帝入名の曰ハク、此ノ精進ノ「之」然ルヲ致ス、「也」。敕を下シテ號を常精進善▲薩に賜フ。仍チ爵を賜ヒテ開國公と爲ス。後一年に疾を得テ琉璃地の復▲現を于前に見ル。行入名か曰ハク、吾レ觀想无シと雖モ、而モ琉璃地、復現ス、豈ニ安養ノ「之」▲期至ルカヤト「哉」。即レの日右脇ニシテ終ル。異香、數日散セ不久シクシテ而肉身壞レ▲不ス

〔裏〕

紙返し  
表見

- 1・2 ▲尼淨眞（ハ）長安の積善寺に住す。納衣乞食（シ）て一生曠（ル）こと无（シ）。金▲剛經（一）十萬編を誦す。專精に念佛す。顯慶五年七月に染疾ス。▲弟子に語（リ）て曰（ハク）、五日の内（ニ）十度阿彌陀（ヲ）見（ル）、觀音、勢至、菩薩、▲僧衆、數を稱（シ）可（カラ）不。如來光を放（チ）て吾身、及（ヒ）室内を照（シ）て咸皆洞明ナリ。又兩度極樂國土の莊嚴（ノ）〔之〕事を見（ル）。寶樓、寶池、雜▲色の蓮華、水上に開敷セリ。金沙、徳水、諸天童子は池中に遊戯（シ）て殊香の芬（二）金鬘（三）郁（四）タルを▲聞（ク）。亦紫金臺を見、天の音樂を聞（ク）。千萬（ノ）▲諸佛皆眞金（ノ）色ナリ。吾か與（五）に授記（シタ）マフ 當に佛に作（ル）こと得《當》（シ）と。吾（レ）上品▲往生を得（ムト）。言（ヒ）訖（リ）て加趺（シ）て〔而〕逝（ク）。光一寺を照す。又尼悟性（入名）（ハ）洛陽（ノ）人（ナリ）。衡▲州に於て照闍梨（入名）に遇（ヒ）て願を發（シ）念佛（ス）。因（リ）て大曆六年に廬山に入（リ）て忽（ニ）病す。空中の音樂を▲聞（ク）。尼（入名）か曰（ハク）、我（レ）中品上生を得（ム）。同（シク）佛を念（スル）人の西方に▲盡（ク）蓮華有（ル）を見ル〔也〕。身皆金色ナリ（ト） 時の年二十四
- 4・5 ▲釋惟恭（ハ）〔于〕荊州の法性寺に出家ス。上を慢（下）リ下を吞（上）ムて非類ニ親狎（入名）セリ。▲或（ル）時ハ暫ク暇アレハ則（チ）經文を誦（シ）て安養に陞（ラム）ことを期す。然 而酒徒博侶（上）〔于〕門に交（下）ハリ▲集ル。虛誑云一爲シテ曾テ虚（シキ）日无シ。同寺の僧靈歸（上）〔入名）有（リ） 跡頗（フル）▲之に類（ス）。荆人、戲（レ）て〔而〕嘲（リ）て曰（ハク）、靈歸（入名）作シテ業を盡ス。惟

1ウ

- 8 恭「人名」其の迹を繼ク。地獄千▲萬重(ナルトモ)頭ヲ排ヒキイテ入(ラ)ムコト(ヲ)厭フコト莫シ(ト)。  
 9 恭「人名」之を聞(キ)て曰(ハク)、我(レ)既(ニ)作セリ「矣」焉イッソ能(ク)之を避(ケム)▲  
 然(レトモ)淨土教主の我か愆ツ(平)惡を憫カサミ我か塗炭ツヲヲ拔(カ)ムコトヲ賴タメリ。詎か地獄に  
 1 沈ム(ヤト)「哉」。▲唐の乾寧二年に恭「人名」病(ミ)て且(ニ)死(ナ)ムト《且ス》。人未(夕)之  
 2 (ヲ)知ラ《未》。歸「人名」時に寺を出(テ)て百▲步可(リニシ)て路(ニ)少年六七人に逢フ。衣  
 3 装サウ(平)鮮(平)整潔セリ 手に樂器を執ルコト、龜玆ノ▲部の若(シ)。歸「人名」其の儔の來(リ)て佛  
 4 を供(ス)ルカと疑(ヒ)て「也」其の故を問フ。少年ノ曰(ハク)、西自り來ルコト、爾(リト)。  
 ▲又曰(ハク)、惟恭上人「人名」か寺、何コカ在ル(ト)。歸「人名」其(ノ)寺を指(シ)て曰(ハク)、  
 5 此レ其(ノ)寺(ナリ)「也」。此(レ)其(ノ)房(ナリト)「也」。少年聞(キ)て「之」意甚  
 6 (タ)喜フ。乃(チ)懷中於、一の金瓶を出す。瓶の中ニ▲一の蓮華を取レリ 其(ノ)合ツ(サ  
 7 ル)こと拳(ノ)如(シ)。漸ク(ニシテ)「而」開(キ)て「之」其の大(キサ)、盆の如シ。葉ハ  
 7 (葉)「之」下カサに▲迭カサに異光を出す。光彩交(平)映(シ)て數燈を聚(ムル)か如シ。寺  
 8 を望(ミ)て「而」馳ス。未(夕)其(ノ)▲寺に達(セ)《未》(ル)に俄に失(ヒ)ヌ「焉」。歸  
 9 (リ)て乃(チ)大に驚(キ)テ敢(ヘ)て廻(平)顧(去)セ)不。次(ノ)日歸(リテ)寺に至(リ)  
 9 て遽チに▲鐘の聲を聞(ク)。又寺僧ヲ見ルニ咸ミ門下ミに集レリ。其の故を問(フニ)則(チ)曰(ハ  
 1 ク)、惟恭「人名」夕(ニ)且(ニ)死(ナム)ト《且ス》(ト)▲「矣」。或(ルヒ)トノ曰(ハク)、恭  
 2 「人名」死(ナム)「之」時、寺僧夢(ミ)ルコト有ラク。蓮華光相、以(チテ)其室に臨ム ▲久(シ

2オ

ク)ア(リ)て〔而〕西(ニ)去(ルト)。歸(入名)乃(チ)具に所見を言フ。閭里(ノ)〔之〕人、或(イハ)其(ノ)事を以(チ)て▲歸ヲ勉ム。▲(歸)因(リ)て感悟(シ)て遂に名節を守(リ)て以(チ)テ高邁(志)を成す(ト)云(フ)

4 ▲釋鴻苞(上)永嘉(ノ)人(ナリ)〔也〕。就(キ)テ〔于〕長安の寶興寺に學ス。長安(ノ)

〔之〕▲人、以(レ)爲(ラク)僧門(ニ)、秀異(ナルコト)、苞(ニ)如ク〔、苞]如(キ)者无(シ)と。

而(レ)トモ)苞(入名)謙(平聲)ト(シ)て未(タ)始(メ)ヨリ自(ラ)伐フ《未》嘗(テ)

6 陳留の蔡圭(平聲)〔入名〕▲與(化)度寺に遊(ヒ)て碑を讀(ミ)目(ニ)數行ヲ贍ル。圭(入名)心に異(ト)

7 ス▲〔之〕苞(入名)に問(ヒ)て曰(ハク)、子能ク誦(シ)テム(ヤト)〔乎〕。苞(入名)か曰(ハク)

8 稍(ク)誦(シ)テム(ト)〔之〕。因(リ)て其(ノ)文を覆スルニ了(ル)に一の誤无(シ)。▲圭

〔入名]苞(入名)か偶(其)〔ノ〕文ニ熟(入聲)セルカト疑(ヒ)テ〔、]復(崇)聖寺に之ク。▲(寺)の碑

9 僅(カ)二十片(モ)。苞(入名)與(▲)偕(ニ)讀ム(コト)纔(カ)ニ一過シテ覆(シテ)〔而〕誦(ス)ル

1 に〔之〕亦初の如(シ)。圭(入名)歎(シ)て曰(ハク)、吾(レ)恭(クモ)儒(爲)リ。俊人▲有(リ)ト

聞(ク)トモ、而(モ)目(ニ)未(タ)之(ヲ)見(未)《未》。今日之ヲ〔於〕子ニ見タリト〔矣〕。苞(入

2 名)答(ヘ)不(暮)▲年に越に遊(フ)。▲越(ノ)〔之〕僧尼、請(ヒ)て二衆の依止と爲。其(ノ)

3 行(爲)〔ル〕コト、常有(リ)。其(ノ)游(フ)▲所方有(リ)。含育慈忍ア(リ)て未(タ)嘗(テ)

4 犬(ト)猫(並濁)を叱(入聲)〔セ〕《未》。毎に觀經を誦(シ)て想を▲〔于〕安養に結(フ)疊(ネ)

5 テ祥異を感ス。苞(入名)默(入聲)ト(シテ)〔而〕說(カ)不(後)唐の天成三年ニ水(ト)▲澇(乎)〔ノ〕

- 〔之〕後、民荐ニ飢<sup>シキ</sup>争<sup>シ</sup>懸<sup>シ</sup>鐘<sup>ヲ</sup>去<sup>ス</sup>。盜<sup>ト</sup>有<sup>リ</sup>テ<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>室<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>リ。莒<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>擣<sup>レ</sup>ル<sup>ル</sup>こと无<sup>シ</sup>。徐<sup>ク</sup>謂<sup>ヒ</sup>テ曰<sup>ハク</sup>、▲汝<sup>ム</sup>曹<sup>ヲ</sup>但<sup>シ</sup>天<sup>ノ</sup>災<sup>ノ</sup>爲<sup>ニ</sup>、因<sup>マ</sup>所<sup>ル</sup>餘<sup>ヲ</sup>他<sup>ニ</sup>无<sup>シ</sup>〔矣〕。此<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>時<sup>ヲ</sup>過<sup>キ</sup>は當<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>愛<sup>ス</sup>《當》〔シト〕。盜<sup>ハ</sup>▲〔者〕愧<sup>ツ</sup>〔焉〕。弟子<sup>其</sup>〔ノ〕備<sup>ヘ</sup>无<sup>キ</sup>ヲ襲<sup>フ</sup>ハムト欲<sup>フ</sup>コト有<sup>リ</sup>〔矣〕。莒<sup>ノ</sup>人<sup>名</sup>か曰<sup>ハク</sup>、汝<sup>若</sup>〔シ〕此<sup>ヲ</sup>爲<sup>サ</sup>ハ、▲吾<sup>カ</sup>弟子<sup>ニ</sup>非<sup>ス</sup>。吾<sup>レ</sup>當<sup>ニ</sup>汝<sup>ヲ</sup>捨<sup>テ</sup>去<sup>ラ</sup>ムト〔矣〕。弟子<sup>乃</sup>〔チ〕止<sup>ミ</sup>。後<sup>唐</sup>ノ長<sup>興</sup>四年<sup>ニ</sup>恬<sup>平</sup>▲然<sup>ト</sup>〔シ〕て病<sup>无</sup>〔クシ〕て弟子<sup>ニ</sup>謂<sup>ヒ</sup>テ曰<sup>ハク</sup>、淨<sup>土</sup>ノ勝<sup>相</sup>適<sup>己</sup>に來<sup>現</sup>〔セリ〕、吾<sup>レ</sup>即<sup>チ</sup>世<sup>ヲ</sup>謝<sup>セ</sup>ム。汝<sup>當</sup>に新<sup>シキ</sup>衣<sup>ヲ</sup>易<sup>ヘ</sup>以<sup>チ</sup>吾<sup>カ</sup>事<sup>ヲ</sup>畢<sup>フ</sup>《當》〔シト〕。其<sup>ノ</sup>夕<sup>ハ</sup>三更<sup>ニ</sup>果<sup>シ</sup>て世<sup>ヲ</sup>謝<sup>ス</sup>〔焉〕。棺<sup>斂</sup>セルコト〔之〕三日、▲一<sup>夕</sup>に倏<sup>チ</sup>棺<sup>ヲ</sup>扣<sup>ク</sup>ヲ聞<sup>ク</sup>。弟子<sup>棺</sup>を發<sup>ク</sup>。莒<sup>ノ</sup>人<sup>名</sup>乃<sup>チ</sup>棺<sup>自</sup>〔リシテ〕而<sup>テ</sup>起<sup>チ</sup>て曰<sup>ハク</sup>、吾<sup>レ</sup>嘗<sup>テ</sup>▲汝<sup>ニ</sup>告<sup>ク</sup>ラク易<sup>フル</sup>ニ新<sup>衣</sup>を以<sup>チ</sup>テセヨ〔ト〕汝<sup>吾</sup>か言<sup>ニ</sup>負<sup>ケ</sup>リ。今<sup>茲</sup>ノ海<sup>衆</sup>我<sup>カ</sup>衣<sup>物</sup>〔ヲ〕潔<sup>ヨ</sup>カラ不<sup>ト</sup>謂<sup>ヒ</sup>テ▲或<sup>イハ</sup>親<sup>シム</sup>コト難<sup>ク</sup>ス〔之〕。故<sup>ニ</sup>我<sup>汝</sup>に就<sup>キ</sup>て易<sup>フ</sup>〔ト〕〔焉〕。衣<sup>ヲ</sup>易<sup>ヘ</sup>畢<sup>リ</sup>て奄<sup>然</sup>と〔シ〕て復<sup>化</sup>〔シ〕又
- 5・6 ▲釋<sup>志</sup>通<sup>ハ</sup>扶<sup>平</sup>風<sup>ノ</sup>人<sup>ナ</sup>リ。天<sup>臺</sup>を訪<sup>ネ</sup>テ<sup>テ</sup>赤<sup>城</sup>に登<sup>リ</sup>、華<sup>頂</sup>に陟<sup>ル</sup>。智<sup>者</sup>ノ名<sup>ノ</sup>淨<sup>土</sup>ノ儀<sup>式</sup>を見<sup>ル</sup>に洎<sup>ヒ</sup>て欣<sup>喜</sup>勝<sup>ヘ</sup>不<sup>ス</sup>。西<sup>ニ</sup>向<sup>キ</sup>て唾<sup>ハ</sup>カ不<sup>ス</sup>。西<sup>ヲ</sup>背<sup>シ</sup>て坐<sup>不</sup>。天<sup>臺</sup>に招<sup>キ</sup>▲手<sup>巖</sup>有<sup>リ</sup>、其<sup>レ</sup>峻<sup>キ</sup>時<sup>争<sup>懸</sup>ヲ爲<sup>セ</sup>リ。下<sup>ニ</sup>千<sup>尋</sup>〔ヲ〕顧</sup>

- 8 (ミ) ルニ<sup>(タ)</sup>。通「人名其(ノ) 上に登(リ) テマ<sup>テ</sup>て顧(ミ) テ曰(ハク)、身▲身 此(ノ) 境に臨メ  
リ 此(ノ) 時に於て報を捨テ<sup>(テ)</sup>マ<sup>テ</sup>て佛を見ラ<sup>ス</sup>不<sup>ハ</sup>、異日尙<sup>(ナホ)</sup> 何ソ及(ハ) ム(ト) (也)。(於)  
是<sup>(コト)</sup>に目を▲冥(シ)て西に向(ヒ)て自(ラ) 大願を陳へ及(ヒ) 彌陀を念す。地所に因(リ)て  
1 行願を發す。マ(願) 已(リ)て身を▲投(シ)て(而) 下(ル)。其の巖(ノ) 半に至(リ)て神物  
2 有(ル)か若(クシ)て之を(于) 樹に捧ケタリ 支體▲損(スルコト) 无(シ)。通「人名か曰(ハ  
ク)、何(ソ) 其(レ) 復<sup>(ツクシ)</sup>生ケルこと有(リ) (ヤト) (耶)。乃(チ) 復<sup>(ツクシ)</sup>心ヲ整(ヘ)、意ヲ 端<sup>(タ)</sup>、端<sup>(シ)</sup>ウ  
3 (シ)て其(ノ) 巖に登(リ)て▲曰(ハク)、餘生已に厭(ヒ)ツ 大願已に發セリ。惟<sup>(オホセ)</sup> (ミ)ル  
4 ニ諸ノ海衆同(シ)ク相(ヒ) 接引(シタマ)へ。此(ノ) ▲身<sup>(シ)</sup>を<sup>(シ)</sup>使<sup>(シ)</sup>て尙<sup>(ナホ)</sup>生(キル) こと有(ラ)  
《使》(ムルコト) 无(カレト) (也)。因(リ)て(之) 再ヒ投ク。(于) 巖下ノ蒙<sup>(モウ)</sup>茸<sup>(シヨウ)</sup> (平瀧) タル  
5 草ノ上(ニ) 至(リ)て遅▲久(シ)て乃(チ) 穌(カ) ヘル。寺僧、通「人名か他ニ適<sup>(ユ)</sup>キ或(イ)  
6 は豺狼の爲に傷(ハ) 所タルカと疑(ヒ)て追(ヒ)て(而) ▲之<sup>(シ)</sup>を尋(ネ)て乃(チ) 其(ノ)  
7 捨身爲(ル) コトヲ見ル(也)。衆乃(チ) 昇<sup>(カ)</sup>イ<sup>(テ)</sup>本(ノ) 道場に歸(リ)て醫療ス▲(焉)。六年  
8 (ニ) 請(ヒテ) 越州の法華山に遊ス。七年に將に寂に歸(セムト) 欲<sup>(ス)</sup> 通「人名白▲鶴、孔雀(ノ)、  
行列(シ)て西ヨリ下ルヲ見(ル)。又〔蓮花光相ア(リ)て(于) 前に開合ス(ル) ヲ〕見(ル)。  
〔通「人名曰(ハク)、白鶴、孔雀ハ淨土(ノ) 境(ナリ) (也)〕。蓮華光相(ハ)、託生ノ處(ナリ)  
9 (也)。淨土已に▲現(レ)ヌ(ト) (矣)。乃(チ) 起(チ)て佛を禮(シ)て佛に對(シ)て(而)  
1 終(ル)。闍維の時に至(リ)て復<sup>(ツクシ)</sup> 五色の煙雲有(リ)て▲其(ノ) 火を環リ覆フ。法華山の僧、

威(ミ) 共に見(ル)〔之〕

- 2 ▲釋紹巖(ハ)雍州(ノ)人(ナリ)〔也〕。母(ハ)張氏、始(メ)て巖(人名)を懷(リ)て夢(ミ)ル。寤(メ)て甚(タ)奇(ト)ス。▲生(ルル)に及(ヒ)て姿(平聲)貌(去)魁(平聲)岸(去)ナリ。十八(ニシ)て具(ヲ)を〔於〕懷暉(人名)律師(ト)に進(ル)。尋(テ)吳曾(人名)に游(フニ)及(ヒ)天臺四明等の山に▲棲(平聲)息(入聲)す。覃(フカ)ク方等の諸經を研(ミ)クコト僅(カニ)十年。又嘗(テ)德韶(人名)禪師(入名)▲與(疑)疑(ヲ)を〔於〕臨川の文益師(入名)に決(シ)て既(ニ)心要(ヲ)を得(タリ)〔矣〕。因(リ)テ▲錢塘ノ湖心寺に止(マリ)て專(ラ)法華を誦す。嘗(テ)曰(ハク)、願(ハク)は此の經萬部を誦(シ)て安養に▲生(レム)ことを期(ス)ト。日夜に精至(リ)て遂に陸地に蓮華(ノ)生(スル)ことを感(ス)〔焉〕。城(ヲ)舉(ケ)て瞻(平)▲矚(入聲)ス 人馬迹を交(フ)。巖(人名)人(ノ)至(リ)て喧(平)噪(去)ナル(ヲ)以(チ)て牽(リ)テ〔而〕蹂(平)シル(之)。建隆二年に▲經願云(コト)に滿(チ)ヌ。其(ノ)身を焚(キ)て彌陀の供養(スル)ことを、清淨海衆(ト)與(ト)に誓(フ)。吳越▲國ノ王錢氏(人名)苦(ハナハシ)意に留(ム)〔之〕 其(ノ)心暫ク止(マ)ル。其の後又身を〔于〕曹娥江の中に投(シテ)以(チテ)魚鼈(ニ)に餒(カ)フ。物有(リ)て以(チテ)之(ヲ)を拯(ス)フニ會(ヒ)ヌ以(チ)テ復(マ)生(スル)こと得(タリ)。漁者巖(人名)ヲ拯(フ)〔之〕時、物有(リ)テ以(チテ)其ノ足ヲ扶(タス)ルカト覺(ユ)ルニ似(タリ)。驚濤(平)迅(去)激(入聲)スルニ▲其ノ上ニ泰然(タリ)。錢氏(人名)聞(キ)て〔之〕益(益)欽愛(ヲ)を加(フ)。特に杭州の寶塔寺に於(テ)▲淨土院を建(テ)て居(ス)〔之〕、開寶四年七月九日、疾有(リ)。疾(疾)の中に蓮▲華光相ヲ目撃(ス) 以(チテ)巖(人名)か身を

7 燭ス。嚴〔人名〕因〔リ〕て偈數首を作〔リ〕て以〔チテ〕門徒に示す。既〔ニシテ〕又▲曰〔ハク〕、吾〔レ〕蓮經を誦〔スル〕こと萬部、期〔スル〕所は異日に蓮華九品、託〔シテ〕以〔チテ〕生を受〔ケム〕。今▲吾〔レ〕未〔タ〕死〔ナ〕《未》〔シテ〕蓮臺先に至〔レリ〕。修〔スル〕所〔ノ〕〔之〕因、豈〔ニ〕我に違〔フム〕〔カ〕ム〔ヤト〕〔哉〕。後三日將に▲亡〔シ〕〔ナムト〕《將》〔テ〕其〔ノ〕心欣慰〔シテ〕自得ス〔焉〕

1 ▲釋守眞〔ハ〕永興〔ノ〕人〔ナリ〕。從朗師〔人名〕に就〔キ〕テ〔テ〕起信論を學す。性光師〔人名〕に法▲界觀を傳フ竝〔ヒ〕に其〔ノ〕要を得〔タリ〕。是〔ノ〕後、勝業を宣揚〔ス〕ルコト四十餘年。始末開▲導拳ト〔拳タルコト一ナルカ如〕〔シ〕。凡〔テ〕起信、及〔ヒ〕法界觀を講〔スル〕こと七十餘徧。燈を以〔チテ〕▲燈を傳〔フ〕器を用〔キ〕テ器〔ヲ〕投〔キ〕シテ〔テ〕法を嗣ク者ハ二十許〔ハカ〕リ〔ノ〕人〔ナリ〕。灌頂の道場を開〔ク〕こと五徧。▲水陸〔ノ〕道場〔ハ〕二十餘會〔ナリ〕。僧尼從〔ヒテ〕〔而〕法を請〔フ〕者ハ三千餘人〔ナリ〕。▲常に〔於〕三更に无量壽往生の密印を輪結ス。五更に文殊▲五髻の神咒〔ヲ〕輪結ス。宋の開寶三年仲夏〔ノ〕五日ニ、正〔ニ〕輪結スル時、自〔ラ〕▲身无量壽國に登ルト覺〔リ〕ヌ。目を舉〔ケテ〕佛を見ツルト。佛池中の蓮華を指〔シテ〕曰〔ハク〕、此〔ノ〕▲華〔ハ〕他日ニ汝か父母爲ラム。汝宜〔シク〕之を守〔リ〕て他日に〔シテ〕華萎〔ルルコト〕无〔カ〕レ〔ト〕〔也〕。四年に▲眞〔人名〕弟子緣遇〔人名〕に謂〔ヒ〕て曰〔ハク〕、如來、死生〔ト〕无常トヲ〔テ〕死生〔ハ〕无常ナリト〔左訓〕云〔ヒ〕テハ不〔サズ〕〔ヤ〕〔乎〕。吾〔レ〕毫〔モウ〕シタリ〔矣〕。▲汝〔ノ〕〔之〕齒〔モヒ〕〔也〕暮レタリ〔矣〕。吾〔レ〕俗に順〔ヒテ〕預〔ラカシ〕

- 3 メニ塔を設(ケムト)欲(フ)、可(ナラ)ム乎(ト)。遇<sup>ア</sup>〔人名〕か曰(ハク)、惟師<sup>ウヱ</sup>(ノ)▲〔之〕命ノマ<sup>マ</sup>(ナリト)。寺僧、及(ヒ)弟子を召(シ)て告(クル)に六趣升沈(ノ)〔之〕苦、萬業流轉(ノ)▲〔之〕因を以(テ)す。因(リ)て聲を叢<sup>アツ</sup>メて彌陀佛を念(セ)令ム。〔佛聲(ノ)〔之〕止ムトキニ繼(ク)ニ贊頌ヲ以(チテ)ス。眞<sup>マコト</sup>〔人名〕彌陀の像の前に▲於て俯シ伏(シ)て念(シ)て曰(ハク)、願(ハク)は佛の四十八願、我(カ)有情を度<sup>ス</sup>(ヒタマ)へ。▲其の願々(願)に於て其(ノ)〔一を〕遺(スコト)无(ケムト)〔焉〕。願(ヒ)畢(リ)て又香華を持(シ)て諸(ノ)堂殿に於て歴<sup>アツ</sup>ク▲供養を陳す。其(ノ)願(フ)所(ハ)〔者〕初(メ)の如(シ)。既(ニシ)て〔而〕問(ヒ)て曰(ハク)、三更乎(ト)。弟子曰(ハク)、已に三▲更(ナリト)〔矣〕。眞<sup>マコト</sup>〔人名〕乃(チ)座に就(キ)て恬<sup>アム</sup>乎然と(シ)て寂に歸す
- 9 ▲釋悟恩(ハ)姑<sup>コ</sup>乎蘇(乎)(ノ)人(ナリ)。母嘗(テ)夢(ミ)ラク梵僧請(ヒ)て曰(ハク)、吾(レ)汝に寄(リ)て母と爲(セ)〔ムト〕欲フ(ト)▲〔矣〕。已(ニシ)て〔而〕娠(去)有(リ)。孩孺<sup>シユ</sup>(去)(ノ)〔之〕閒、戲(去)玩<sup>アソ</sup>〔去〕ヲ親(シマ)不。年十三(ニシ)て僧の彌▲陀經を誦(スル)を聞(キ)て遂に俗を棄(スル)コトヲ求ム。崑山の慧聚寺に依(リ)て博(ク)五部の律文を訪
- 3 フ。▲靈光の皓(去)端師<sup>ア</sup>〔人名〕に從(ヒ)て諸經を研味ス。懸<sup>ア</sup>乎解<sup>カ</sup>(去)(ノ)〔之〕旨、輒ク抗(去)敵(入懸)(シ)難シ。天▲臺三觀六即(ノ)〔之〕義、人未(タ)之(ヲ)究メ《未》と雖(モ)、率
- 5 ネ冥(乎)解(上)ス〔之〕。晚に錢▲塘の志因師<sup>ア</sup>〔人名〕に依(リ)て法華、金光明等の諸部の大經を通す。
- 6 一時の學者▲盛に相(ヒ)推伏(シ)て義虎と號す〔焉〕。恩<sup>ア</sup>〔人名〕生平ニ潔苦ナリ日<sup>タシ</sup>に惟一食(ノ)

- 7・8 ミナリ)。▲餘財を留(ヌ)不。長衣を畜へ不。其の寺一ノ布薩毎に、萬衆雲集す。布▲薩ヲオムル時常に淨土を指(シ)て勝業と爲す。宋の雍熙三年八月朔ノ夜▲恩「人名」白光數道を見(ル)。井(二)由(リテ)「而」出(ツ)。明滅常(ナ)ラ不。門人に謂(ヒ)て曰(ハク)、明滅▲常(ナラ)不ルコトハ死生ノ象(ナリト)「也」。乃(チ)食を絶テ言を禁(シ)て一心に佛を念す。後三日(二)シテ條ニ梵▲僧一人を見(ル)。儀形甚(タ)偉シ。鑪を捧(シ)て三(タ)ヒ其(ノ)室(ヲ)繞ル。恩「人名」問フ「之」。僧の曰(ハク)、吾(レ)は▲灌頂「人名」(ナリ)「也」。淨土に生(ルル)こと久シ「矣」。汝か所修、我か「之」志に同(シクスル)を以(チテ)の故に來(リ)て相ヒ叩ク(ト)。
- 4 ▲俄(ニシ)て「而」弟子至ル。僧且(マ)夕失(セ)ヌ「焉」。次の日、座に陞(リ)て具に所見を言(フ)。亦▲弟子の爲に止觀、及(ヒ)諸經の要義を敷説す。義文將に徹(リ)ナム(ト)《將》て恩「人名」色か曰(ハク)、瞬息(ニ)保チ▲難キ、古今ノ常ノ言ナリ。吾(レ)豈(ニ)能(ク)今日ヲ保(タム)「ヤト」「哉」。是の日坐(シ)テ「于」止▲觀(ノ)「之」講堂に亡(セ)ヌ。夜半に至(リ)て寺僧文偃(上)「人名」有興「人名」等空中の歌唄(ノ)▲「之」音を聞ク。依(平)一稀トシテ西に去(ル)▲杭州の慧日永明寺ノ智覺禪師延壽(ハ)餘杭(ノ)人(ナリ)。姓は王氏(ナリ)。▲總(上)角(ハ)輕(ノ)「之」歳、六旬(ノ)「之」内、法華經(ノ)全秩ヲ誦す。既(ニ)冠リシテ輩(平)輕ヲ茹ラハ不。日に▲惟(一)食(ノ)ミナリ。長(シ)て懸ノ衙ノ校(カ)去(カ)爲(リ)。壯(年)に道を暮(暮)フて吏ノ業を棄(テ)て翠巖▲禪師「人名」に投(シ)て出家ス。衣(シ)續(去)セ不。食味ヲ重セ不(ル)爾。後詔國師「人名」に參見ス。▲授(クル)に心法を以(チテ)す。『初(メ)』天臺の智者岳に住(シ)て

7ウ

- 5 九旬定を習フ。烏有(リ)て衣衾の中に巢クフ。法華(ノ)懺を▲修(シ)て七年を經タリ。禪觀の中に觀音菩薩(ノ)親(ミヅカ) (ヲ)甘露を以(チ)て(于)口に▲灌(キタ)マフを見(ル)。遂に觀音の辨才を獲て筆を下(シ)テマ(テ)文を成(シ)て卷ニ盈(チ)テマ(テ)乃チ已ム。志▲西方淨土を求(メ)て神棲安養の賦、證驗の賦、萬善同歸集、宗▲鏡錄を共(ニ)數百卷著(ハス)。雪竇(去)山院ニ住持(シ)て朝暮に法を演フ。夜は則(チ)▲阿彌陀佛を念(シ)て行道發願ス。日課(ハ)一百八事ナリ。未(タ)嘗ヨリ廢(乎)輟(入懸) (セ)《未》。錢ノ▲忠懿(去)王(入名請) (ヒ)て永明に住(マ)シム。徒衆二千(ニシ)て晝夜修持シテ愈(ト)精進ナリ。學(フ)▲者參問シテ則(チ)壁(立)セルコト千仞(去) (ナリ)。心を指(シ)て宗と爲(悟)を以(チ)て訣(入懸)と爲(日暮(ルレ)は▲別(ノ)峰に往(キ)て行道念佛(ス)。自(ラ)繼キ難(キ)カ爲(去)ニ、衆ヲ強フルコトヲ欲(セ)不(去)然(レトモ)密に相(ヒ)隨(フ)者▲常に百人に及(フ)。夜靜(カナ)ルトキニ四旁(乎)ノ行人、山中の螺唄天樂(ノ)〔之〕聲ヲ(イ)を聞(ク) ▲之を伺求(ス)ルニ師の山腹の中の平夷の處に於て旋繞行道スルを見ル。忠懿王(入名歎) (シ)て曰(ハク)、▲古自(リ)、西方を求(ムル)者未(タ)《此(ノ)如(キ)〔之〕專切(功)カナル》有(未) (ト)《也》。遂に開山に於て西方香嚴殿(ヲ)立(テ)て以(チ)テ師(ノ)〔之〕志を成(ス)是(ノ)如(クシ)て永明に住(スル)こと十五年(ナリ)。弟子を度(スル)こと、一千▲七百人(ナリ)。常に七衆の與に菩薩戒を授(ク)。夜は鬼神に食を施(ス)。晝は生▲命を放(ツ)コト其(ノ)數を計(ラ)不(去)皆淨土に廻向す。開寶八年二月二十六▲日の晨に至(リ)て起(チ)て香を焚(キ)て衆に告(ケ)て加趺(シ)て〔而〕

- 1 逝ク。没後數年ニ僧有(リ)、▲囊を結(ヒ)て師の所居の寺、并(ヒニ)眞塔(ノ)「之」所在を
- 2 訪(ネ)て勤拳(平懸)瞻禮(ス)ルコト數日已(マ)▲不。之を問(フ)に答(ヘ)て曰(ハク)、某
- 3 (上)遍名は契光「人名撫州(ノ)人(ナリ)「也)」。素(ヨ)リ師の名を知(ラ)不(ス)昨▲疾に因(リ)
- 4 死(シ)て陰府に至ル。所司の殿宇ヲ見(ル)に、王者の居の若(シ)。文籍を閱(シ)テ「曰
- 5 (ハク)、汝未(タ)▲當(ニ)死(ヌ)《當》(カラ)《未》、速に返ル(ヘシ)。人を遣(リ)て護送
- 6 (セシムト)「之」。仰(キ)て殿間を觀(ル)に盡(ク)僧ノ像を掛ケタリ。王▲香を焚(キ)て頂
- 7 拜す。乃(チ)獄吏に問(ハク)、此(レ)何人ソ 王之レニ奉ツ(リ)テ「勤メタマフ(ト)。
- 8 吏の曰(ハク)、凡(ソ)人(ノ)「之)▲生死、此(レ)に由ラ不(ル)者无シ。唯此の一人(ノ
- 9 ミ)、[于]此レを經不(ト)。王之を識(ラムト)欲て乃(チ)▲其(ノ)像を畫ク。是(レ)杭
- 10 州の永明寺の壽禪師「人名(ナリ)「也)」。今已に西方(ノ)九品上生ナリ▲「矣)。釋迦(ノ)滅度自
- 11 (リ)、已來、此の方(ニ)九品上(上)ニ生(ルル)もの方ニ第二人ナリ。王所▲以(ニ)之
- 12 二奉(リ)テ「て」(ニ)勤メ耳(ノミト)。某既に生(キル)こと得て晝夜に聖人の眞身の塔
- 13 ▲骨(ノ)「之)遇(ヒ)難(キ)ことを思想ス。是(レ)ヲ以(チ)て千里を遠(クセ)不(シ)
- 14 て「而)來ル(ト)「耳)。撫州の僧を問(フ)者は法名▲志全「人名(ナリ) 其(ノ)人已に老(イ)
- 15 タリと雖(モ)、今淨慈ノ長老圓照禪師「人名親(ラ)之を見タリ ▲問(フ)ニ「之)傳(フ)ル所
- 16 ノ如(シト)云(フ)

4・5

▲抗州の下天竺山の法師遵(去式)(ハ)秀州(ノ)人(ナリ)。天臺の教を傳(フ)。學高ク▲行苦(ネムミ)

- ロナリ。名二浙(入懸)に冠メタリ。博(ク)教觀を習(ヒ)テ「而」志を安養に專(ラニ)ス。  
 6 嘗(テ)▲般舟三昧を要期(乎)シテ四十九日、常行(シ)テ「而」寐(イ)不(ス)素(モトヨ)リ羸(入)疾を苦  
 7 (ミ)テ日(ヒ)ニ血を吐(ク)こと▲數升。師死を以(チ)テ自(ラ)誓フ。遂に道場の四角に於テ各(オノオノ)  
 8 灰ノ盆(ホト)キを置ク。行道の及(フ)▲所、灰(ノ)盆(ノ)中(ノ)に吐(ク)。兩足の皮裂(ル)レトモ誓  
 9 (ヒ)テ退轉(セ)不(ス)忽に一日(ト)恍(ト)トシテ夢(去)濁▲寐(乎)セリ。白衣(ノ)觀音ヲ見ル。手  
 1 を垂(レ)テ「於」口の中を指(シ)テ穢蟲數十條を引出す。▲又指の閒ヨリ甘露を出(シ)テ其  
 2 (ノ)口に注ク。身心清淨(ニシ)テ快悦ス。此(レ)自(リ)、宿疾(ニハセ)頓に▲愈(ユ)。既(ニ)饑  
 3 (平)懸(ヲ)出(ス)こと頂相、高(サ)寸餘(ナリ)。雙手下(ニ)垂(レ)は膝を過(ク)。聲鳴  
 3 鐘の如(シ)。▲皆舊與、異(ナル)。歎仰(セ)不(ル)コト莫(シ)「之」。日は生命を放(チ)、  
 4 夜は食を施す。水邊の漁▲者夜鬼(ヲ)聞クに相(ヒ)謂(ヒ)テ曰(ハク)、今大雪(フ)レルコ  
 5 ト甚シ 饑主出(ツ)可(カラ)不(ス)奈(何)ト。有(ル)モノか曰(ハク)、▲饑主の慈悲必(ス)  
 6 我等を忘(レ)不(シ)且(ク)待(テ)、且(ク)待(テト)。良久(シクシ)テ衆鬼笑ヒ呼フテ▲曰(ハク)、  
 7 饑主の果(シ)テ來レリ 我等飽(キ)ヌト「矣」。漁者起(チ)テ伺(フ)に「之」果(シ)  
 7 て師の燈を携(テ)雪を▲踏(ミ)テ「而」至(ル)を見ル。其(ノ)精感此(ノ)如(シ)。又嘗(テ)  
 8 緣事を以(チ)テ蘇州に過(ク)。城に入(リ)テ三▲日、葷血市に絶エ、擯(入懸)一酤(乎)售(ラレ  
 9 不(ス)。長吏之レニ法(入懸)ヲ置(カ)ムト欲(ス)。寮佐方(ツト)メ勸ム▲「之」。乃チ已(ヤ)ムヌ。往生淨土決疑行願

- 1 二門、淨土懺儀を著(ハス)。(於) ▲世に行(ハ)ル
- 2 ▲觀音縣の君(ハ)〔者〕姓は吳氏(ナリ)。龍圖閣の直學士遵(平)路(上)〔入名か妹(ナリ)〕〔也〕。
- 3 其の▲夫は都官員(平)外(志)郎呂宏(平)〔入名 揚州の廣陵(ノ)人ナリ。進士に擧(ケラ)レテ京師に遊フ。▲異僧發(シ)テ妙に佛理を悟ル。吳氏〔入名〕〔於〕是(ノ)時に家に居リ。因(リ)テ金剛般▲若經の頌を閱(シ)テ亦空寂ヲ契ル。比(ヒ)ニ宏〔入名〕か歸ル。夫婦 各(オノオノ) 已(ニ)齋戒清▲淨(ニシ)テ苦節シテ自(ラ)修(ス)ルコト四十年に迫(ヒ)タリ。其の身を終(フルマ)テに少(シ)モ懈ラ不。吳氏〔入名〕▲三の侍女有(リ)、亦皆輩血を絶(チ)テ勤メカメテ助(ケ)テ勝業を爲す。各(オノオノ) 三十五歳を以(チ)テ▲卒す 其の一は頗(ル)禪理を好(ム)ルニ猶怡然と(シ)テ笑語す。人を屏(ケ)テ〔而〕逝(キ)ヌ ▲蛻(モノケ)ヲ委セルカ如(シ)〔也〕。其の一は奉戒剋苦(スル)ナリ。或(イハ)采(平)瀧)月ニ食セ不。但日に吳氏カ▲咒(スル)所ノ、觀音ノ淨水一盃ヲ飲(ム)、而已(ミ)一日に忽に金蓮(ノ)雙足ヲ〔を〕捧(タルヲ)見ルコト〔者〕▲三タヒ其(ノ)前に在リ。
- 3 已(リ)テ〔而〕早夜ニ坐作(入)變シテ左右俯仰シ目ヲ開キ目ヲ瞑(ツル)ニ▲見(エ)不(ル)こと无(シ)〔也〕。又數日其(ノ)膝(ヤ)を見(ル)。又數日其(ノ)身を見(ル) 又數日其(ノ)面▲目を見(ル)。其(ノ)中(ハ)則(チ)阿彌陀、左右の觀音、大勢至(ナリ)〔也〕。已(ニシテ)〔而〕又悉(ク) ▲其(ノ)殿堂國界を見(ル)。皎トシテ掌を指(ス)カ如(シ)。曉然と(シ)テ心に其(ノ)安養淨土(ト)イフコトヲ知(リ)ヌ〔也〕。或(ル)ヒト▲詰(ツ)ル〔之〕。對(ヘ)テ曰(ハ

10ウ

- ク、彼土の功德嚴淨(ニシテ)意言の限量を以(チ)て述(フ)可(キニ)非(スト)〔也〕。又問(ハク)▲其ノ女人何如(ト)。曰(ハク)、彼皆清淨ノ男子ナリ 經行遊樂(シ)て女人无(シト)〔也〕。▲又問(ハク)、彼(ノ)佛如何(ニ)法を説(キタ)マフ(ト)。曰(ハク)、我(レ)眼通を得て未(タ)天耳を得《未》 故に但(タツ)▲其(ノ)問答(ノ)指(ト)顧(去)を見て〔而〕所説を聞(ク)こと能(ハ)不(也)。是(ノ)如(キコト)〔者〕三年、未(タ)嘗(テ)▲一瞬モ前に在(ル)を見不(ハ)アラ《未》(ト)。後に疾を感(シ)て自(ラ)往生(ス)ト言(ヒ)て〔而〕終(リ)ヌ。吳氏〔又名觀▲音に事(ヘ)て靈感有(リ)。毎に淨室に於て瓶缶(ト)數十を列(ネ)置(キ)て水を以(チ)て中に滿(タシ)て▲手に楊柳を持(チ)て咒を誦す。必(ス)觀音の光ヲ放(チ)テ〔て〕諸器ノ中ニ灌(キタ)マフヲ見(ル)。疾苦(ノ)者水を▲飲(メ)は輒ク愈(ユ)。咒セル所ノ、水歳を積(ミ)て腐(上)不(不)大キニ寒キに凍(ラ)不(世(ニ)號(シ)て觀▲音縣の君と云(フ))

- 6 ▲明州の黃長吏(上)〔又名女、早(ク)樂(入)輕氏〔又名に嫁(シ)ケリ。後其(ノ)夫ニ喪(モ)ス 誓(ヒ)て復嫁(セ)不(ト)。父の舎に▲居て安養(ノ)〔之〕業を修す。志願精切ナリ。臨終の時、手に彌▲陀の印を結(ヒ)口に佛の名號を稱す。地を履(ミ)て〔而〕行(キ)て儼(上)然と(シ)て立(チ)ナカラ逝(キ)ヌ。魂(平)輒(平)ノ廻ル▲夕眷愛俗ニ順(ヒ)テ〔て〕灰ヲ〔於〕地ニ篩(ル)テ〔て〕用(キ)テ其(ノ)生(マレム)か處ヲ驗す。盆ヲ開(ク)ニ及(ヒ)テ〔て〕灰ノ中

11オ

- ニ蓮華一朶（上濁）生（シ）タリ。池沼ヲ出（ツル）か如（シ）。觀（ル）者の〔門に〕盈（テリ）。僧皓  
 麟〔入名目擊〕▲踊躍（シ）て乃（チ）讚を爲（シ）て曰（ハク）、西方淨土、祇マサに目の前に在リ。精進  
 2 は近シ〔矣〕。懈▲怠は遠シ〔焉〕。十六觀行、九品蓮臺、果熟（シ）て自（ラ）度ス。華生（シ）  
 3 テ〔て即〕（チ）▲開ク。清淨ノ善女、至信廻ラ不。寶華瑞ヲ標ケテ永ク將來に示す（ト）  
 4 ▲光州の司士參軍〔平懸〕王仲回ハ无爲郡（ノ）人（ナリ）。因（リ）テ本郡ノ坊〔平懸〕埠カシ▲利クホナリラ  
 5・6 陳（フ）ルニ〔て〕大司農〔入名〕其ノ實ヲ考ヘ得タリ。朝廷ニ請（ヒ）テ〔て〕恩ヲ推ス。乃（チ）  
 7 是ノ〔命〕有リ。其（ノ）▲性爲ラク、信厚未（タ）嘗（チ）人與短長を較カク（入懸）（セ）《未》。天  
 8 衣の懷禪師〔入名〕鐵佛道▲場に住（ム）。時に亦嘗（テ）請問す。而（シテ）鄉里善人ナルを以（チ）  
 9 て稱す〔之〕。既（ニシ）て〔而〕淨▲土ニ信嚮す 但未（タ）深心ヲ具（ヘ）《未》（ルノミ）〔耳〕。  
 1 元祐の初に至（リ）て余に問（ヒ）て曰（ハク）、經典に多（ク）彌▲陀を念（シ）て淨土に生（ル  
 ル）ことを教フ。祖師（ハ）則（チ）云（ハク）、心（ハ）即（チ）是（レ）淨土ナリ（ト） 更に  
 2 ▲西方に生（ルル）ことを求（ム）ルコトヲ用不。其レ不同（ナ）ルコト何ソ（ヤト）〔耶〕。答  
 3 （ヘテ）曰（ハク）、實際（ノ）理地（ハ）、佛无（ク）、衆生无（ク）、▲樂无（ク）、苦无（ク）、壽  
 4 无（ク）、夭无（シ）。又何（ソ）淨穢之（レ）有（ラ）ム。豈（ニ）更ニ生不▲生を以（チ）て心  
 と爲（ムヤ）〔耶〕。此は理を（モチ）て事を奪（フナリ）〔也〕。然シカレトモ而此（ノ）界に處（スル）者  
 5 は是（レ）衆生（カ）〔乎〕。▲是（レ）佛（カ）〔乎〕。若（シ）是（レ）佛境（ナラ）は則（チ）

- 6 衆生に非(ス) 又何(ソ) 苦樂、壽、夭、淨、穢之(レ) ▲有(ラムヤ)〔哉〕。試(ミ)に自ら  
 付思(ス)ルに或(イハ)未(タ)衆生(ノ)〔之〕境を出(テ)《未》(レハ)則(チ)安(クンソ)  
 7 教典を信(シ)て心を▲至(シ)て彌陀を念(シ)て〔而〕淨土に生(レム)ことを求(メ)不(ル)  
 8 可(ケムヤ)〔哉〕。淨ハ則(チ)穢に非ず。樂は則(チ)苦无(シ)。壽は▲則(チ)夭无(シ)〔矣〕。  
 9 无念の中に於て念を起(シ)、无生の中に於て生を求(ム)。此(レ)事を以(チ)て理を▲奪フ(ナ  
 1 リ)〔也〕。故に維摩經に曰(ハク)、諸佛國、及(ヒ)衆生空與(レ)を知(ル)と雖(モ)、而(モ)▲  
 常に淨土を修(シ)て〔於〕群生を教化(スト) 正(シ)ク是(レ)ヲ謂フ(ナリト)〔也〕。又  
 2 問(ハク)、如何(ニシテ)念(スル)こと▲閒斷(セ)不(ル)ことを得ムヤ(ト)。答(ヘ)て  
 曰(ハク)、一信(ノ)後、更に再(ヒ)疑(ハ)不(ル)、即(チ)是(レ)閒斷(セ)不(ル)ナリト  
 3 〔也〕。司士〔人名〕▲欣(平聲)躍(シ)て〔而〕去(リ)ヌ。二年十二月且(ノ)〔之〕夕に至(リ)て  
 4 余丹陽郡に守(去)タリ。忽(ニ)夢(ミラ)ク、▲司士〔人名〕か云(ハク)、向(マモ)ニ淨土を指(示)スル  
 5 ことを蒙(テ)て今已に生(ルル)こと得(タリ)ト。特に來(リ)て相(ヒ)謝(ス)ト。乃(チ)再▲拜  
 (シ)て〔而〕出(テ)ヌ。翌日に丹(平聲)徒(平)ノ令陳安〔人名〕ヲ召(ム)テ〔イ〕て止(タ)ニ其(ノ)夢を語  
 6 ル。蓋(シ)陳令〔人名〕▲深(ク)淨土を信(スルカ)故(ナリ)〔也〕。後數日に司士〔人名〕か〔之〕  
 7 子進士術(ス)カ哀(ラ)得(タリ)。計(リ)ミルニ乃(チ)信(ニ)然ナルコトヲ▲知(リ)ヌ。又聞(ク)、  
 司士〔人名〕未(タ)亡(ナ)《未》(ル)、已前(ノ)、七日(ニ)、預(メ)時の至(ル)ことを知(リ)

12ウ

8 て郷舊(去)與別レ▲爲ル(ヲ)。時に余か弟作(入)整(入)名(モ)亦坐(在)在(リ)て屢見謝(ノ)「之」  
 9 語有(リ)。然(レハ)則(チ)、司▲士(入)名(モ)決シテ淨土ニ生セリ(矣)。元祐四年四月八日ニ无爲ノ  
 楊(平)傑(入)カ述(フ)

1 ▲新修淨土往生傳下

(四行分ノ空行アリ)

2 ▲無量清淨平等覺經兩卷 後漢(ノ)月支三藏譯

3 ▲無量壽佛經二卷 曹魏康僧鎰譯

4 ▲無量壽如來會品二卷 大寶積第十七十八 云圖菩提流志譯

13オ  
1

▲阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經二卷 吳(ノ)支謙譯

2 ▲右(ノ)經(ハ)譯(スル)所(ノ)文句小(ワツカ) (三) 不同有(リト) 雖(モ)其(ノ)實一本

(ノ) 經 (ナリ) (也)

3 ▲觀無量壽佛經一卷 宋(ノ)元嘉中譯

4 ▲阿彌陀佛經一卷 姚秦什法師譯

5 ▲稱贊淨土佛攝受經 唐(ノ)奘大三藏譯

6 ▲右(ノ)二經(ハ)本(モト)同(シ) 別(ニ)譯(ス)

7 ▲鼓音聲王陀羅尼經

東大寺圖書館藏「新修淨土往生傳」影印並びに訓読文

13ウ

8 ▲佛說大乘無量壽莊嚴經三卷 縣

9 ▲無量壽經論優波提舍願生偈

1 ▲天臺智者十疑論

2 ▲慈愍三藏淨土慈悲集三卷

3 ▲安養法師往生論六卷

4 ▲慈恩基法師彌陀經通贊二卷

5 ▲清涼沙門澄觀〔觀〕經疏一卷

6 ▲天臺觀經疏一卷

7 ▲道綽禪師安樂集三卷

8 ▲懷感法師決群疑論七卷

9 ▲念佛寶王論三卷 沙門飛錫撰

14才

1 ▲往生淨土傳五卷 沙門飛錫撰

2 ▲善導和尚二十四讚并一行禮文等

3 ▲壽禪師萬善同歸集三卷 神棲安養賦

4 ▲源信禪師淨土集二卷

5 ▲天竺沙門遵式淨土懺儀一卷

- 6 ▲又往生淨土決疑行願二門
- 7 ▲孤山阿彌陀經疏一卷
- 8 ▲孤山西資鈔 西方念佛三昧集一卷
- 9 ▲杭州ノ仁和縣ノ候(去) 潮門外ノ界ヒ奉ル
- 1 ▲三寶ニ、弟子守越州ノ助(去) 教(平) 凌(リョウ) (平) 大中[人名] 弟大(去) 正(去) [人名] 大順(去) [人名] (ト)
- 家
- 2 ▲眷(トモカシ)ノ等(ト) 與意ナル者、
- 3 ▲先考九(上) 評(平) 事ノ爲ニス。生平ニ
- 4 ▲西方ノ阿彌陀佛ニ歸依繫念ス。屬(入) 纏(入) 續(入) (ノ) [之] 際、期スル所ノ如シ。七日ニ毫光ヲ觀テ(入) 微
- ▲笑正念シテ(而) 逝(キ) タリ
- 6 ▲華藏ノ義公和尚[人名] 目擊證明ス。又當ニ淨土傳ノ板ヲ開(キ) テ(入) 謹(ミ) テ淨財ヲ
- 7 ▲捨テ(入) 此ノ緣ヲ成シテ(入) 用テ伸フ。追(ヒ) テ莊嚴ヲ薦ク。仍テ願(ハク) ハ見聞讀誦(ノ)
- 8 ▲者、及(ヒ) 一切衆生、咸ク極樂(ノ) [之] 邦ニ歸シテ(入) 速ニ菩提(ノ) [之] 道ヲ證(セ) ム。
- 9 ▲時(ニ) 崇寧元年六月ノ望(去) 日(ニ) 謹題ス

1 ▲ 錢塘西湖ノ妙慧院ノ住持傳法賜紫釋文義勸緣

(二行分ノ空行アリ)

2 ▲ 保元三年六月十七日已刻於東大寺北院書了

3 ▲ 〔朱書〕 同月十九日一交點了 辨昭〔自〕手書了

4 ▲ 願(ハクハ) 諸(ノ) 衆生(ト) 共(ニ) 安樂國(三) 往生(シ) 乃(チ) 臨終(ノ) 時

(ニ) 至(リテ) 彌陀佛(ヲ) 見奉(ラムコトヲ)

補注

表8丁オ9 .. 「志」に付されたヲコト点は、位置としては「の」と覚しいが、文意から「す」と認定した。

表11丁オ5 .. 「懺悔」の「悔」に付されたヲコト点は、位置としては「の」と覚しいが、文意から「す」と認定した。

表15丁ウ4 .. 「生」字に付された訓「シウ」は未詳。  
表19丁ウ2 .. 「命」字にはヲコト点「の」の他に、位置としては句点と覚しき点が存する。但し、文意からは「命」字で文が切れず、よって、この点を採用していない。

表20丁オ9 .. 「矣」字には句点の他に、位置としては反点と覚しき点が存する。但し、文意からは「矣」字が返読されず、よって、この点を採用していない。

裏表紙見返し .. 「光」字にはヲコト点「を」の他に、位置としてはヲコト点「こと」と覚しき点が存する。但し、文意からは「こと」を伴って訓み下し得ず、よって、この点を採用していない。

裏1丁オ1 .. 「因」字にはヲコト点「て」の他に、位置としては句点と覚しき点が存する。但し、文意からは「因」字で文が切れず、よって、この点を採用していない。

裏5丁オ3 .. 「拳々」の次に補入符が付されているが、補

裏5丁オ8 .. 「見」の右傍の訓「ツル」を採用して訓み下すならば、「佛を見ツル。」となり、連体形終止の例となるが、存疑。

裏7丁ウ9 .. 「没後」の「後」字の右傍に朱点有るも、未詳。

裏10丁ウ2 .. 「瓶缶」の「缶」の字の右傍に「フ」の如き訓有るも、未詳。